

# MPJ YOUTH

大学生が見た  
ウズベキスタンのいま。

ウズベキスタン研修  
報告書・アーティクル



## – 研修代表挨拶 –

今回のアジア短期研修は、2019年2月18日から2月26日にかけて、大学・学部・学年の異なる9名の参加者で、中央アジアの1国、ウズベキスタンに訪問しました。また訪問前から勉強会やアポイントなどの準備を重ねてきました。しかし、参加者、特に上級生が少なく、MPJ Youthの研修が始まって以来、初めて大学3年生以上が不在の研修となりました。そのような中でも、無事に、有意義な研修とすることができましたのは、皆さまの多大なるご支援・ご協力のおかげです。

我々を温かく迎えていただいた訪問機関の皆さまに、心から感謝申し上げます。私たちの急な訪問の申し出にも関わらずお受けくださり、本当にありがとうございました。日本では得られない、ウズベキスタン現地で職務をこなす皆さまの経験と知識を共有していただき、非常に実りある研修となりました。

また、日頃より弊団体の活動を支えて下さる、鈴木りえこ理事長をはじめとするSDGs・プロミス・ジャパンの皆さまには、この度の研修に際しても様々なご協力をいただきました。誠にありがとうございました。今後ともに、弊団体をよろしく願いたします。

MPJ Youthの皆さん、そして本研修に参加してくれたメンバーの皆さん、最後まで研修を支えてくれてありがとうございました。MPJ Youth内部からの支えが欠けていても、この研修は成立しませんでした。研修メンバーの皆さんが、1人1人メンバーであることを自覚して参加してくれたことで、無事に研修を終えることができました。心から感謝するとともに、研修代表として参加できたことを誇りに思います。

最後になりましたが、改めて本研修に携わっていただいたすべての皆さまに、心よりお礼申し上げます。今後もMPJ Youthは、アフリカを「学び、発信する」ことを通じ、日本とアフリカをつなぐ団体として、自分たちが得た経験・知識を社会に共有してまいります。本当にありがとうございました。

MPJ Youth 2018年度アジア短期研修代表  
行方皓哉

## 02 研修代表挨拶

## 03 研修の概要

## 04 スケジュール

## 05 会計報告

## 06 メンバー名簿

## 07 メンバーから一言

## 07~20 機関訪問

11 住友商事タシケント事務所

13 プロフセンター

17 JICA ウズベキスタン事務所

19 サマルカンド外国語大学

23 NORIKO 学級

25 Bibi Hanum

## 27~64 個人研究

29 鉄道から見るウズベキスタン

35 ウズベキスタンにおける男女彩色や宗教意識について

37 現代のシルクロードがウズベキスタンに及ぼす影響

41 ウズベキスタンの電力政策について

45 ウズベキスタンにおける外国企業進出の現状

49 ファッションの多様性と伝統衣装の保護

53 ウズベキスタンと日本の文学を通じた交流

59 ウズベキスタン人の歴史認識について

61 多民族国家における初等教育の言語的課題

## 67~77 個人感想

15, 21, 33, 40, 47, 57, 65 コラム

78 ウズベキスタン研修語録

# 研修の概要

ミレニアム・プロミス・ジャパン・ユースの会(以下、MPJ Youth)は、2009年3月にモザンビークに派遣された学生を中心に結成され、以降2週間程度のアフリカ研修を通して、ルワンダ、ガーナ、タンザニア、ウガンダ、マラウイに渡航してきました。貧困や紛争といったネガティブな面だけでなく、ポジティブな面も含めた様々な切り口からアフリカについて「学び、発信する」ことをテーマとし、アフリカに関する勉強会とその成果の発信を主な活動としてきました。

また、MPJ Youthは2018年に創立10周年となり、「新たな10年のきざし」として本研修が実施された2019年を迎えました。従来、アフリカとアジアとの比較という観点から、東南アジアに限定した短期アジア研修を実施してきました。しかし今回の短期アジア研修では、視野を広げ、中央アジアの1国、ウズベキスタンに渡航することとなりました。

ウズベキスタンは我々日本と同じ、「アジア」というくくりの中にもありますが、アフリカと同じように私たちにとってなじみのある国ではありません。しかし古来より、シルクロードとして、ユーラシア大陸の歴史を担ってきた地域でもありました。歴史、民族、宗教、教育、文化、政治、経済。どれをとっても東南アジアとは、そして日本とも異なるアジアの一面を見せてくれます。そんなウズベキスタンとアフリカを比較することは、ステレオタイプのアフリカのイメージを壊すだけでなく、同時に、ステレオタイプのアジア像も壊し、柔軟で新しい価値観を私たちに与えてくれます。そのような「学び」にこそ、真の相互理解や国際交流が生まれると確信しております。

今回の短期アジア研修は、2019年2月18日から26日にかけて、大学・学部・学年の異なる9名の参加者で実施されました。研修前に、ウズベキスタンに関する事前勉強を行い、それに基づいて各研修メンバーの興味分野を明確にし、研修中に訪問する機関を決定しました。その結果、さまざまな皆様のご協力を得て、JICAや現地の企業、NGO、学校の訪問が実現いたしました。各機関を訪問するたび、研修メンバーは新たな発見をし、訪問の意義を感じていたようです。詳しくは、本書に記載されている内容をご覧ください幸いです。

# スケジュール

日時	時間 (現地時間)	スケジュール
2月18日	10:20 13:20-15:55 17:10-20:50	成田空港 集合 成田発/ソウル着 (航空機) ソウル発/タシュケント着 (航空機)
2月19日	10:00-12:00 昼食 15:00-17:00 17:00~	住友商事 プロフセンター JICA TVタワー周辺を観光
2月20日	午前 午後 夕食	ナヴォイ文学博物館周辺を観光 ティムール博物館周辺を観光 韓国館
2月21日	11:30-13:00 午後	Bibi hanum チョルスーバザール周辺の観光
2月22日	7:30-11:19 昼 15:48-17:20	Tashkent発/Bukhara着 (鉄道) ブハラ観光 Bukhara発/Samarkand着 (鉄道)
2月23日	午前 午後	サマルカンド外国語大学 同学生と、サマルカンド観光
2月24日	午前 17:30-19:40	サマルカンド観光 Samarkand発/Tashkent着 (鉄道)
2月25日	午前 14:30-17:00 22:50~	ナヴォイ・オペラ・バレエ劇場周辺の観光 ノリコ学級・懇談会 タシュケント発 (航空機)
2月26日	~9:05 15:45-17:55 18:30	ソウル着 ソウル発/成田着 (航空機) 成田空港 解散



▲ブハラ市街図



▶タシケント市街図

# 会計報告

会計		9人分(円)	9人分(ドル)
ホテル代	Orient Palace	96220	850
	Dilshoda	44827.2	396
	Jules Verne Tashkent	23736	
航空券代	アジアナ航空(往復)	814190	
海外保健代	HS保険(タビトモ)	23490	
鉄道代	Afrosiyob (3回)	110183.22	973.35
通信費	WIFI代	17676	
	SIM代	3146	25ユーロ
土産代		9702	
雑費		7168	
		1150338.42	
	1人あたり	127815.38	≒127816円

※1ドル113.2円換算  
 ※1ユーロ125.83円換算



# 研修メンバー

名前	読み	学年	大学	学部学科	備考
行方皓哉	なめかたこうや	2	東京大学	経済学部経済学科	本研修代表
岡田悠乃	おかだゆうの	2	東京大学	経済学部経済学科	副代表
島本高志	しまもとたかし	2	東京大学	経済学部経済学科	
高橋愛理	たかはしえり	2	上智大学	文学部英文学科	
片岡恵音	かたおかあやね	1	東京外国語大学	国際社会学部アフリカ地域専攻	
岸野桜子	きののさくらこ	1	東京大学	前期教養学部文科3類	会計
桐原萌恵	きりはらもえ	1	立教大学	文学部文学科英米文学専修	
副島紘介	そえじまこうすけ	1	東京大学	前期教養学部文科3類	
山根祐斗	やまねゆうと	1	東京外国語大学	国際社会学部アフリカ地域専攻	

## メンバーから一言



東京大学経済学部2年  
**行方皓哉**

今回の研修は、自分にとって昨年のタンザニア研修に続いて2回目となりました。全く風土や歴史の異なる2つの地域が比較でき、貴重な経験となりました。この経験をいかし、今後もMPJ Youthを通してアフリカを学び、周囲へと発信していきたいと思っています。

東京大学経済学部2年

## 岡田悠乃

今回の研修では、風土に適応し歴史と深く関わりながら形成されてきた人々の暮らしを垣間見たり、自分の感覚と乖離した価値観に触れたり、とても貴重な経験をさせて頂きました。今後アフリカを学ぶ上でも、各地域の背景を理解しつつ新たな面を発見し、伝えていきたいと思っています。と発信していきたいと思っています。



東京大学文科三類1年

## 岸野桜子

主に教育と文学に関心を持っています。ウズベキスタン研修では、学生とディスカッションする中で、「漫画」の持つ文化交流の可能性に気づきました。今後もみなさんから刺激を受けながら、文化の交流について深めていけたらと思います。



上智大学文学部英文学科2年

## 高橋愛理

このウズベキスタン研修を通じ日本には分からない様々なことを学ばせていただきました。意欲的なメンバーとともにこの研修に参加できたことをとても嬉しく思います。今後もアフリカや異国について多方面から知識を深め視野を広げていきたいと思っています！



東京外国語大学アフリカ地域専攻1年

## 山根佑斗

ウズベキスタン研修では、多くの貴重な体験をさせていただきました。自分のルワンダ渡航の経験もあわせて、MPJに還元出来たらと思います。また、将来に向けて専門性を付けられるような活動をしていきたいです！



東京大学経済学部2年

## 島本高志

今回のウズベキスタン研修では、機会が無ければ一生行かなかったであろう国で、企業訪問や機関訪問、現地学校との交流など、ただツアー旅行等に行くだけでは決して体験できなかったらう濃密な体験をさせていただくことが出来ました！この経験を活かして将来もグローバルに活躍できる人材になれば良いなと思います。



東京大学文科3類1年

## 副島紘介

このウズベキスタン研修が僕にとってMPJ Youthでの初の研修参加となりましたが、支えてくれた先輩方、同期のおかげでとても楽しく実りある経験となりました。今後ともMPJ Youthで自分を成長させて行けるようみんなと共に頑張っていきたいです！



立教大学文学部1年

## 桐原萌恵

私は去年のマラウイ研修と合わせてこの研修が2回目の研修でしたが、今回アフリカ地域と中央アジアとの比較という素晴らしい経験が出来ました。これからもユースの一員としてアフリカについて学びを深めて行きたいです。



東京外国語大学アフリカ地域専攻1年

## 片岡恵音

大学やユースでアフリカについて勉強を始めて1年経ちますが、今年は自分の興味分野以外でもさまざまな知識を得たいと思っています。ウズベキスタン研修で受けた刺激を忘れずに、積極的に取り組んでいきたいと考えています！



# 機関訪問

ウズベキスタンで活動する様々な分野の機関、企業のご好意で、  
ウズベキスタンに関するお話を聞かせていただいた。  
現地での直接のやりとりを通して得た気づきや発見は、  
メンバーにとって掛け替えのない学びとなったことは間違いない。

- 住友商事タシケント事務所 11
- プロフセンター 13
- JICA ウズベキスタン事務所 17
- サマルカンド外国語大学 19
- NORIKO 学級 23
- Bibi Hanum 25

## ウズベキスタンのビジネス事情

# 住友商事タシケント事務所

ウズベキスタン研修の2日目に住友商事タシケント事務所を訪問し、副所長である茅島氏にお話を伺った。その際に伺ったお話についてまとめたいと思う。個人研究報告書と内容が重複する部分が多々あること、また本文章の内容は茅島氏のお話の全てではなく一部を抜粋させていただいたことをお許し願いたい。

まずは茅島氏のご経歴に始まり、ウズベキスタンにおけるビジネス環境について様々な点からお話を伺った。茅島氏は今までにコートジボワール、ガボンなどの西アフリカ、サウジアラビアやUAEなどの中東、インドネシアなど幅広い世界の国々でビジネスをされてきたそうだ。その経験の豊富さのために、単なるウズベキスタンの状況だけではなく、他の途上国と比較した観点からもウズベキスタンの状況を説明してくださり非常に興味深かった。

まずは、ウズベキスタンにおけるビジネス環境について、ミルジヨエフ大統領が就任して以降の改革による効果について質問させていただいた。一連の為替改革や税制改革により、今まで外国企業にとって大きな障壁となっていた外貨の持ち出し制限など外貨に関する制限はなくなり、確かに変化が見られるとのこと回答であった。一方で外貨だけが問題ではなく、政府によって発表される統計の信憑性の低さや、書類手続きなどの手続きの複雑さなどが障壁として残っているそうだ。統計については、以前滞在されていた西アフリカの国々などと比べても、統計の信頼性はそう高くはないという。

また日本企業に関して言えば、ウズベキスタンへの進出の前例が少ないために、投資に見合ったリターンを見極めるのが難しいのが現状だそうだ。今後日本企業の進出が徐々に進んで行くにつれて、リターン予測も容易になって行くとのことであった。

また、二重内陸国ウズベキスタンならではの輸送に関する問題についてもお話を伺った。ウズベキスタンは海からの距離が遠い二重内陸国であるために、輸送コストが高く、輸送にかかる日数が長いという。鉄道輸送の方が輸送費は安い、自動車に関して言うと、自動車輸送の場合ガソリンを抜く必要がある、シベリア鉄道では冬の厳しい寒さで自動車の車軸が凍結してしまうなど様々な問題が立ちだかっているそうだ。本来であれば、イラン経由での輸送が最もコストが低く、所要時間も短いそうだが、アメリカによるイランへの制裁などの国際情勢から難しいという。今後もウズベキスタンでのビジネスではロジスティックが最大の課題だとおっしゃっていた。

これらビジネス環境の話のほかにも、ビジネスチャンスを発掘する総合商社ビジネスの面白さや、グローバルで働くために必要なことなどについてもお話をしてくださった。グローバルな現場の最前線で働いている茅島氏ならではの様々な貴重なお話を伺うことができた。今回の訪問を快く引き受けてくださった住友商事タシケント事務所の茅島氏に深い感謝の意を示したい。(副島 紘介)



▲茅島さんとの記念撮影。

▼二重内陸国（国境を接する国が全て内陸国である国）であるウズベキスタン



## 中央アジアの食文化に触れる プロフセンター(タシケント)

ウズベキスタンの食文化に興味を持ったため、私は訪問先を有名な観光地であるタシケントのプロフセンターにすることにしました。プロフとは結婚式などの式典の際に食べられる中央アジアの伝統料理であり、ウズベキスタンは中でも中心地にあたる。羊肉やゆで卵などを添えた油で炒めたごはんのようなものである。サマルカンド外国語大学を訪れた際に学生たちがおすすめしてくれたり、サマルカンドで泊まったホテルの方に作っていただいたホテルでの晩御飯の一発目がプロフであったことからプロフがいかにウズベキスタンの代表食であるかがわかる。

プロフセンターに着いて一番初めに目に入ったのは外にある大きな釜であった。タクシーを降りた瞬間油を多く使用するプロフ独特の香ばしい香りが漂い2、3人の男性が大釜で大量のプロフを炒めていた。その間を抜けプロフセンターの中に入ると、想像していた以上に天井が高く二階席まで存在していたが、店内は観光客や地元の人々で賑わっていた。プロフをいただく前にまず出てきたのは大きな丸いナンであった。大きなナンを数人で分け合い少しお腹が膨らんだころ、メインのプロフが出てきた。一人で食べるには少し多い気がしたが油が多い割に案外食べやすく美味しかった。

私は自身の研究テーマに関する質問をするため英語を話せるイスラム教徒のウズベク人学生に話を伺った。というのも、そのプロフセンターでは彼女しか英語が話せる人がいなかったのだ。はじめは事前に訳したロシア語で頑張っていたものの、やはり限界を感じお店の方が連れてきてくれた。その後も何人かのお話を聞かせていただき、私が抱えていた疑問のいくつかが晴れた。そのうちの一つは最初に外でプロフを炒めていた男性たちに関わることである。私はプロフについて調べていたとき、プロフは主に男性が作るものであるというのを見て、そこに存在する男女差の意識は存在するのかと疑問を抱いた。当人らに話を聞くとそこに差別などマイナスな感情はなく、ただ男性の方が釜をかき混ぜる力が強いので大勢の文を作る際には男性が作る人が多いなどの理由が挙げられた。ウズベキスタンでの滞在を通して現地の方々は思っていた以上に男女の垣根を意識していないのだと感じた。今回訪れたプロフセンターは多数の観光客が訪れている観光スポットでもあるのでウズベキスタンを訪れた際にはぜひ訪れることをお勧めする。(高橋 愛理)



◀プロフセンター内部

▼緊張した面持ちで食事に臨むメンバー



## ウズベキスタンにおける食事について

ここではウズベキスタンでの食事についてお話する。まずウズベキスタンに来て私たちが一番最初に食べたのはプロフと呼ばれるお米や肉、野菜やスパイスなどを油で炒めたウズベキスタンの伝統料理である。みんなで一人一皿頼み、量も油もとても多かったが味は案外食べやすく美味しかった。プロフはやはりウズベキスタンで人気の料理で、後で訪れたサマルカンドのホテルで振舞われたりサマルカンド外国語大学の学生たちにお勧めされたりもしたが、当のウズベキスタンの現地の人々は普段はあまり食べないらしく現地の人との触れ合いによって観光地としてのウズベキスタンとリアルなウズベキスタンを両方感じることができた。

プロフ以外にもウズベキスタンで人気の肉の串焼きであるシャシリクや、たくさんの野菜をトマトベースのスープで煮込んだ中に中太麺の入ったラグマンと呼ばれるものなどを食べ、どれもスパイスや油がよく効いているものの薄味に慣れている日本人でも美味しくいただけるものばかりであった。

たくさん食べたウズベキスタン料理の中でも、我々が地味に一番多く食べたのはナンと呼ばれる真ん中に針で模様を入れた大きくて平たいパンであった。食事の際に常に出されるもので食事前にそれでお腹がいっぱいになったこともしばしばである。サマルカンド外国語大学の方々に美味しいシャシリクのお店に連れて行ってもらったときにもそのパンが出てきて、慣れた手つきで引きちぎり食べやすい大きさにしてくれた。バザールのお土産屋さんなどにはナンに模様をつける針山が売っておりこれもまたウズベキスタンの伝統食であることがうかがえた。モスクや聖廟だけでなく食事をするときのお皿やカップなども細部まで綺麗な模様で彩られていたためウズベキスタンの人々は生活の中にもこだわりを強く持っているのだと感じた。また、伝統食以外にもお茶や牛乳など日本でも飲めるものがスーパーなどで購入できたが味は日本のものとそう大差はなかったし、水道水はもちろん飲めないが水はスーパーで安く数十円で購入できた。

行く前は発展度合いがはっきり想像できておらずドキドキであったが、食事はもちろん衛生面においても良好で危惧するものは何もなかった。しかしチョルスバザールでは生肉が常温で置いてあったりレーズンやクルミなどが新聞を敷いて地面に置いてあったりと日本では絶対に見られない光景もありとても興味深かった。

一週間ウズベキスタンに滞在するにあたり食事はある意味最重要であると個人的には思うが全体的に日本人の口にとても合っていたので有難かった。日本にもウズベキスタン料理を専門とするお店がいくつかあるようなのでまたウズベキスタンが恋しくなった時にはみんなと食べに行きたいと思う。

(高橋 愛理)



プロフと  
飲み物のチャイ。



この肉が  
「シャシリク」



プロフセンターとは違った  
タシュケント市内で食  
べた料理。その店はバ  
イキング形式だった。

## ウズベキスタンにおける日本の取り組み

# JICA ウズベキスタン事務所

2月19日の午後は、JICA ウズベキスタン事務所に伺った。まず、JICA の対ウズベキスタン協力の概要を説明して頂き、その上で研修メンバーそれぞれの質問に対応して頂いた。

JICA はウズベキスタンの独立から2年が経過した1993年から協力を開始した。その後徐々に活動範囲を広げ、現在では大きく分けて、経済インフラの整備、民間セクターの活性化、農村地域開発、人材育成の4つの分野に重点を置いて活動している。

経済インフラについては、主に火力発電所の改修や施設内の機材の高機能化を通じて電力の持続的な安定供給を図ったり、既存の鉄道を電化することで貨物輸送（運輸交通）の効率化を図ったりしているそうだ。二重内陸国であるウズベキスタンが周辺国との運輸交通手段を整えることの重要性はよくわかったが、電力については、タシケント空港から市街地への道では華やかなイルミネーションが途切れることがなかったため少々疑問に思った。実際は今でも農村部だけでなく都市部でも計画停電は起きることもあるようなので、電力のより安定した供給が望まれることを認識した。

次に、民間セクターの活性化については、中小企業の経営者を対象に、ビジネス人材を育成するプロジェクトを実施しているそうだ。様々なコースが用意されていたが、その中でも聾哑者向けITコースがあり、幅広い人材の教育に力を入れていることがとても印象に残った。

3つ目の農村地域開発については、乾燥地域であるウズベキスタンの農業に欠かせない灌漑施設の改修や、非感染症疾患予防対策プロジェクトといった保健医療分野における協力が行われているとのことだった。後者に関しては、気候の影響から運動する習慣があまりないこと、ウズベキスタン料理は油を多く使っていて味も濃いことなどが理由で、生活習慣病患者が多いということを補足して下さった。また、予防のためには、医療施設や行政機関レベルでの協力だけでなく、農民を対象に教育を行うことも重要であるとおっしゃっていた。

最後に、人材育成については、修士号取得を目的とした留学生の受け入れ促進や、公務員の本邦・第三国研修の実施、草の根レベルでの人的交流が行われているそうだ。その中でも最後の人的交流に関連して、青森のりんご栽培の技術をウズベキスタン農村部へ共有、農工大の養蚕技術を移転するなどの取り組みは、繋がりが身近に感じられた。

質疑応答に関しては、エネルギー、経済、教育、ジェンダーなど多分野に渡ったため、中でも印象に残ったものを取り上げたい。ウズベキスタンでは一帯一路政策等が関連して中国企業の影響が大変大きいものと予想していたが、感覚としては韓国のプレゼンスが大きいとのことだった。もちろん、中国製品は既に多く流入しているし、投資額も増えている。しかし、地理的近接性を考慮して、中国のインパクトが大きくなりすぎないように警戒しているようだ。



▲JICA・ウズベキスタン事務所の外観。

一方の韓国は、高麗人が移住してきたという歴史的背景もあり繋がりが深い。政策アドバイザーといった国家の重要な役職にも韓国系の人材が採用されている。今後これらの影響力がどのように変化するか、また日本の影響力は依然として低い中でどのように参入していくか、日本の支援はスピード感は他国に劣っても確実性と質で勝負ができるという特徴をどのように活かしていくか、ということ念頭に置きながら、今後もウズベキスタン情勢に注目していきたい。(岡田 悠乃)

▼JICA・ウズベキスタン事務所の高嶋さまと研修メンバー。



## 日本語を学ぶウズベキスタン大学生と サマルカンド外国語大学

今回のウズベキスタン研修の六日目にサマルカンド外国語大学の日本語学部を訪れた。目的は、教育、言語、経済、文学など研修メンバーの個人研究テーマに沿ってそれぞれが現地の学生に話を聞くためである。本稿ではこの大学の概要を記す。

サマルカンド外国語大学は1994年の11月8日に創立された。現在では英文学I学部、ロマ・ドイツ語学部、翻訳理論および実践学部の三つの学部に分かれ、それぞれの学部いくつかの学科が存在する。

私たちが訪問した日本語学部は、翻訳理論および実践学部の極東言語学科に属する。この学部は1995年に、学科は2001年に設立された。同学科設立当初は韓国語のみであったが、2006年に通訳の育成を主な目的として日本語学部も開設された。日本語教師は現在7名いるが、JICAから人が派遣される場合もある。日本の大学では、信州大学、筑波大学、北海道学院と提携しており、留学している学生も数名いる。授業では日本語の文法や発音だけでなく、日本の文化についても学ぶ。その内容は紫式部や大江健三郎、井上靖などの文学から、音楽、茶道、盆栽、歌舞伎など多岐にわたる。各年度ごとに「日本文化の日」を設定し、学部の学生と教員が協力して活動する。

ウズベキスタンでは、日本語を学ぶ学生は年々増えており、それを考慮して日本語センターは最近別のキャンパスに移転した。日本語学部に限らず、同大学では、言語だけでなく文化を学ぶことに力を入れており、翻訳者などを育成するための実践的な場となっている。

先に述べたように、研修メンバーはこのサマルカンド外国語大学で日本語を第一言語として学ぶ学生と交流した。個人的には、三年生の日本語がとても流暢であったことに驚いた。私も彼らと同じように外国語を専門的に学ぶ身ではあるが、私が三年次に彼らと同じくらい流暢にフランス語であったりスワヒリ語であったりを話している姿は今までは全く想像できない。また、彼らの日本語の流暢さだけでなく、私たちと積極的に交流を図ろうとする前向きな姿勢にも大きく刺激を受けた。私の他の研修メンバーも各々に刺激を受けたようだった。非常に有意義な時間を過ごせたと思う。(片岡 恵音)



▲サマルカンド外国語大学の外観。

▼午後はサマルカンド外国語大学のメンバーと交流した



## 青の都・サマルカンド

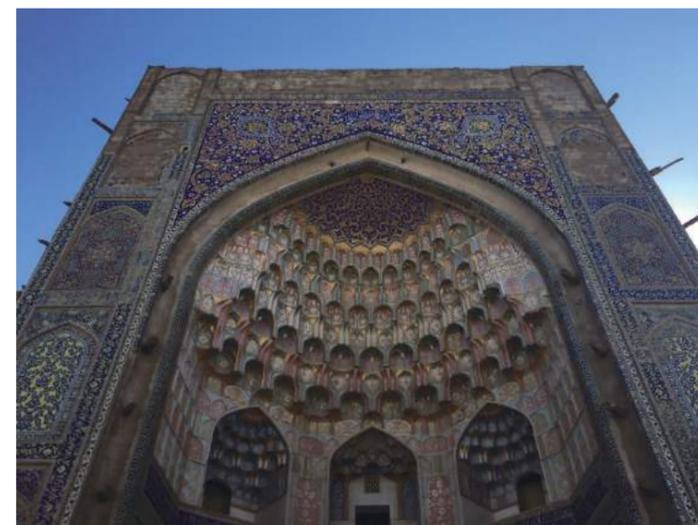
サマルカンドは、古来シルクロードの要地として繁栄してきた。所謂「絹の道」の一部でもあり、交易の担い手であった。中世には、ティムール朝の首都として大いに発展した。多くのモスクやマドラサが建設され、文化の中心となった。現在のサマルカンドは、当時の遺跡を残しながら、現代的な快適さも兼ね備えた町である。グル・アミール廟やレジスタン広場といったイスラーム建築や、ウルグ＝ベク天文台といった文化的遺産が多い観光都市として発展している。首都のタシュケントを東京とすると、文化と歴史を伝えるサマルカンドは京都といったところだろう。そのためか、英語・日本語ともタシュケントよりも通じやすく、旅行者にはありがたい街だった。

サマルカンドは「青の都」とも称され、美しい建造物が並んでいる。この由来は、モスクやマドラサに施された青色のアラベスクであろう。アラベスクとは、植物をかたどったイスラーム世界特有の装飾で、サマルカンドでは鮮やかな青で彩られたアラベスクが随所でみられた。日本では見られない美しい文様は、エキゾチックで厳かな雰囲気を与えている。他方で、例外的に青以外の装飾も見られた。ティムール廟の内部などは、対照的に大胆な金を使った装飾で、帝王の威厳を示していた。色以外にも、西洋建築や日本建築とは異なる、イスラーム式の建築様式には目を奪われた。大きなドーム型の屋根や、高くそびえる光塔（ミナレット）は、あたかも世界史の教科書から飛び出してきたかのような迫力だった。

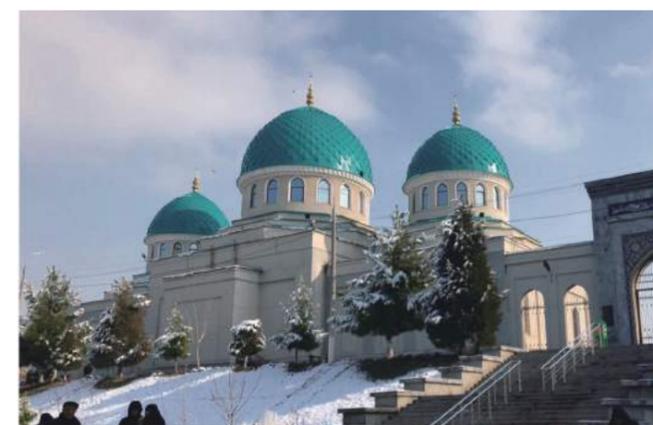
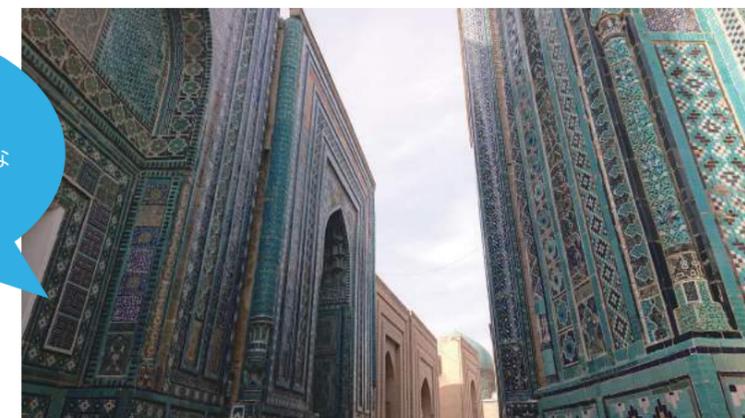
観光資源の多さからか、土産物屋も多く、また積極的であるように思われた。「一分だけ!」といいながらやや強引に店に入れ、やはりやや強引にセールスをする土産物屋がよくみられた。彼らの圧に負けて想定外の品物を買ってしまうメンバーも多かった。観光資源そのもの以外にも、過ごしやすさや観光し易さは特筆すべきだろう。前述のとおり、タシュケントより英語が通じやすく、街道の整備のされ方からも観光者への配慮が見て取れた。スポットを結ぶ簡易的なシャトルバスも見られた。タシュケントに比して、圧倒的にストレスなく観光できた（サマルカンド外国語大学の学生方の案内によるところも大きいが）。

総じて、サマルカンドは、訪れたなかで最も魅力的でかつ快適な都市だった。タシュケントやブハラにも十分な魅力があるものの、サマルカンドは我々が思うところの「ウズベキスタン」「イスラーム世界」を最もよく再現していて、多くの新鮮な感動を得られた。もちろんサマルカンドがウズベキスタンの全てではなからうが、少なくともウズベキスタンに来たら一度は訪れるべき場所だろう。制約があったとはいえ、訪問期間が短かったことが悔やまれてならない。

(山根 佑斗)



緻密な文様は  
美しくエキゾチックな  
雰囲気を伝える



## 日本人が創った無料の日本語学校

# NORIKO 学級

NORIKO 学級とは、1999年、建設機械の会社コマツのエンジニアとして赴任した大崎重勝氏がフェルガナ州のリシュタンに建設した無料の日本語学校のことである。幅広い年齢の子供達が日本語や日本文化を学習しており、商社や銀行など日本企業で活躍している卒業生もいる。研修最終日、NORIKO 学級の校長先生と4人の生徒にタシュケントのウズベキスタンホテルに来ていただき、ウズベキスタンで日本語を学ぶ意味や、ウズベキスタンでの普段の生活などについて自由に質問させていただいた。

独学で日本語を身につけ、大崎氏の後を継いで無料の日本人学校を続ける校長の Ganisher Nazirov (ガニシェル・ナジロフ) さんに、今の仕事を続けることにおける思いを尋ねた。学校を始めた当時にはそこまでのやる気はなく、大崎氏と同じ質問をしたこともあったそうだ。その時には「あなたはまだ若いから、私の思いがわかっていない」と言われたという。大崎先生のことを尊敬しており、あの人のおかげでどれだけ人の人生が変わったかが今はわかる、とおっしゃっていた。今はその情熱がうつり、60歳をすぎて先生になりたかったという夢を叶えようという思いも相まって学級を運営し続けている。

一般的な日本語学校とは違い、文法ではなく会話を中心としている。日本人の時間や約束を守り、勤勉な性格やマナーの良さに感心し、日本語を教えるときには文化やマナーも必ず教える。ウズベキスタンも日本も家族やお年寄りを大切にする精神が共通しているそうだ。ウズベキスタンに日本人にもっと来てほしいとおっしゃった。日本企業を進出させる際、教育して現地の人材を雇用する点にも触れられていた。TIFA(Toyonaka International Friendship Association) のプログラムにより、実際に日本を訪れたことがある生徒もおり、彼らは日本に対して「人が優しい」という印象を抱いていた。生徒たちは、日本に留学したり、就職したりしたいという大きな夢を持っている。リシュタンの陶芸を日本に広めたい、日本のIT技術を学び、IT企業に就職したい、ダイハツの車を日本に持ってきたい、などと考えている生徒がいた。熱く夢を語る姿に感銘を受けた。NORIKO 学級の方々との交流を通して、言語にとどまらない日本とウズベキスタンのつながりを感じた。また、より多くの日本企業の進出が求められていることがわかった。今後ますますの両国のつながりが強くなっていくことを期待したい。(岸野 桜子)



▲NORIKO 学級の生徒さん

▼ガニセル校長先生との集合写真



## 伝統工芸品を紡ぐファッションブランド

# Bibi Hanum

2月21日に私たちはタシュケントにオフィスを構えるファッションブランド、Bibi Hanum（ビビハヌム）を訪問し、代表の Muhayo Aliyeva さんにお話を伺い、オフィスと併設してある作業場を見学させていただいた。色とりどりの布と美しい工芸品で溢れるオフィスでメンバーそれぞれの質問に答えてくださり、大変貴重な時間であった。

2006年に設立されたビビハヌムは、ウズベキスタンの伝統的工芸品の販売と国内外へのマーケティングを行う事で伝統文化の保護をするほか、熟練した技術を持つ農村部の女性の社会進出を促進しているブランドである。

事前に調べた情報から、従業員は全員女性で占められているのではと予想していたが、女性だけではなく仕事内容によっては男性が担当する作業行程もあるという。特に糸の染色は力仕事であるので男性が行っているのだと仰っていた。

ここで衣服を作る過程を紹介する。まず、ムハヨさんがパソコンを使ってデザインする。そのデザイン画を見て、縫い合わせたときに模様ができる様に、染色担当の人が各種の糸を染める。織る過程では、縦糸と横糸を一本一本丁寧に、繊細に全て手作業で織ってゆく。ウズベキスタンでは旧ソ連主導の現代化の政策により衣服生産は手工芸から工場製のものへと移り変わったのだが、1991年の独立後はその荒廃しつつある伝統を復興させようとする動きが高まった。ビビハヌムも全て手作業で衣服を製作

しているため、それが熟練された技術を持つ人々の雇用を生み出し、伝統文化の保護につながっている。

全て手作業で作られているビビハヌムの商品は決して安くはない。そのためか、国内からの顧客はいるが、国外からの方が多い。国内でのシェアは少ないが、まず国外に伝統的工芸品を発信して価値をつけてもらう事で、国内でもそれらの製品に対するポジティブなイメージが高まり、ビビハヌムの製品か否かに関わらず、結果として伝統文化の保護につながるという仕組みだ。

イカットは元来、結婚の持参品として製作されており、花嫁は結婚が決まると母親やそのほかの女性の助けを借りて、5～10枚のイカットを織っていた。また地位を示すものとしても認識されていたという。文化と密接に結びついている手織りのイカットだが、安さが魅力の工場生産のものに市場競争で破れたり、他国で大量生産されたコピー商品が出回ってしまう事が問題視されている。そんな状況だからこそ、従来の方法でイカットを作り続けて世界に発信することが現在重要だと思われる。（桐原 萌恵）



▲ Bibi Hanum の入り口

Aliyeva さんとの記念撮影 ▼



# 個人研究

各メンバーが、自身の興味関心に沿った研究テーマを設定し、

現地での聞き取り調査などを行った。

現地機関での質問や現地大学生との交流は、

それぞれに大きな刺激と洞察を与えた。

■ 鉄道から見るウズベキスタン	29
■ ウズベキスタンにおける男女意識や宗教意識について	35
■ 現代のシルクロードがウズベキスタンに及ぼす影響	37
■ ウズベキスタンの電力政策について	41
■ ウズベキスタンにおける外国企業進出の現状	45
■ ファッションの多様性と伝統衣装の保護	49
■ ウズベキスタンと日本の文学を通じた交流	53
■ ウズベキスタン人の歴史認識について	59
■ 多民族国家における初等教育の言語的課題	61

行方 皓哉 個人研究

# 鉄道から見るウズベキスタン

ウズベキスタンは世界に2つしかない、二重内陸国の1つである。もう一方の国、リヒテンシュタインは豊かなヨーロッパの中央に位置し、スイスという後ろ盾もある。しかしウズベキスタンは中央アジアに位置し、アフガニスタンをはじめとした隣国の情勢は不安定である。そんなウズベキスタンだが、国内の治安はよく、天然ガス等の資源は豊富で、経済成長のためにこれらをヨーロッパ等へ輸出する必要がある。そこで生命線として出てくるのが、鉄道、である。首都タシュケントは中央アジア有数の鉄道分岐点であり、ロシア帝国時代より同地域の最重要拠点となってきた。近年高い経済成長を誇るウズベキスタンの鉄道事情がどのようなものか、大きく国外、国内の2つに分けて考察していきたいと思う。

まずは国外である。鉄道は航空機に比べて積載量が大きく、費用対効果が高い。しかし船舶に比べると積載量が限られ費用も高いため、いかに鉄道での距離を短くし、船舶での距離を長くするかが重要である。またウズベキスタンは天然ガスがでるものの石油輸入国であり、この2つの安定的な輸出・輸入を行うルートの確立が必須である。そのためのルートは4つある。1つ目がイランを経由して湾岸諸国にアクセスするルート。これは中東の産油国にアクセスしやすく、比較的鉄道距離も短くて費用も低い最適なルートである。しかし2019年2月時点ではアメリカ・EUによる対イラン制裁のため、イラン経由の取引は企業やウズベキスタン自体が制裁対象となるというリスクを抱えている。

そのため次に挙げられるのが、シベリア鉄道を經由する、伝統的なルートである。ウズベキスタンからカザフスタン、ロシアへと行き、最終的にはヨーロッパないしウラジオストクへとつながる。しかし訪問させていただいた住友商事の方に伺ったところ、シベリア鉄道経由でヨーロッパに行くルートは費用と時間がかかり過ぎて効果的ではなく、極東ルートのみが実際には使われているとのことだった。ただここにも問題が存在する。寒冷地帯を通るため自動車といった精密機械をウズベキスタンから輸出する場合、不凍剤を使ってこまめに手入れする必要があり、貨物の積載量の規制があるためいったん一部を分解する必要もある。

そこで近年、3つ目として出てきたのはカザフスタンから中国へ行く、いわゆる一帯一路構想の一環として建設されている鉄道だ。このルートの評価は現段階では難しい。しかしJETROの調査でも2013年以降このルートで用意される貨物車の量は順調に増加しており、中国政府の方針を念頭においても将来これが極東、アジア方面における主要ルートになることは間違いないと思われる。

最後の4つ目はカスピ海横断鉄道ルートである。ウズベキスタンからトルクメニスタン、同国西端のトルクメンバシュからカスピ海を船舶で超えてアゼルバイジャン、そして再び鉄道を使ってトルコを経由して地中海へと到達する。このルートは現在ヨーロッパへの主要ルートとなっており、産油国アゼルバイジャンを通るこ

ともあり、石油の輸入ルートにもなっている。また2017年にはトルコ、グルジア、アゼルバイジャン3か国を通るBTK鉄道が完成し、南コーカサス地域側での輸送能力も上がっていて将来性も高い。ただし近年のシリア内戦、ロシアやアメリカを含む先の3か国の複雑な外交関係もあり、いつこのルートが途絶するかも分か

らないのが現状である。以上より、中国、カスピ海経由を中心として周辺の鉄道網は整備されてきているといえる。しかし依然としてそれは不安定であり、鉄道需要にこたえ続けられるかは不明で、今後ともにウズベキスタン政府は新たなルートの模索と安定化を求めているだろう。



◀ 研修に際して実際に使った予約用のwebサイト。  
▼ 細く要求を記載して、届けて欲しいところを指定する形になっている。

ADVANTOUR		ONLINE PAYMENT
Name:	Mr. Kouya Namekata	
E-mail:	tuyuaoi46@gmail.com	
Your order:	Kouya Namekata+8 JPN	
	February 22,22,24, Tashkent-Bukhara-Samarkand-Tashkent, 27 train tickets+delivery	
Amount Due		
Price:	945 USD	
Transaction fee:	28.35 USD (3%)	
Total:	973.35 USD	
<input type="button" value="Make payment"/>		

◀ 日本から振り込みを行うのだが、実際に上手くいっているのかは最後まで不安であった。

次が国内である。国内の鉄道の特徴として、2000年代に入り急速に整備されている旅客輸送の存在があげられる。貨物輸送のほかに、旅客輸送としてタシュケント市内を通る地下鉄と高速鉄道があるが、本稿では地下鉄を扱わず、本書の他のページで紹介していきたいと思う。まずは貨物輸送をみていこう。2013年のJETROの調査によると、国内に敷設されている鉄道の総延長距離は4230kmでこれは世界ランク36位、また貨物輸送量は16位と、両者を比べても貨物輸送の比率が極めて高いのが分かる。実際、同年の国内輸送の90%は鉄道が担っていた。鉄道網は国内の東西全域に及び、主要都市のほぼすべてを通っている。しかしソ連時代の設備は旧式化し、電化されている部分は約7分の1で、複線化されていない部分も多い。ソ連時代に中央アジア全体をつなぐように鉄道網がひかれたため現在の国境と路線が合致しておらず、一部区間がトルクメニスタン領域を通過して円滑な輸送の妨げとなっていた。だがこれらの問題は、日本を含む諸外国の援助と、ウズベキスタン政府自身による積極的な政策で改善しつつある。新線を敷設することで2009年には貨物の輸送を自国内だけでできるようになり、2012年には日本との間に円借款がなされ鉄道橋と信号設備の整備、電化が進むこととなった。このように近代化されて国内需要も高いため、国内の貨物輸送の将来はおおむね明るいといえるだろう。

では旅客輸送はどうであろうか。2016年にシャヴカト・ミルズィヤエフ大統領が就任して以降入国ビザの緩和がおこなわれ、日本も2018年に30日以内の滞在であればビザが免除されることとなった。その結果、ウズベキスタン政府の発表によると2017年は269万人だった観光客が2018年には530万人へと増加し、2025年に909万人の達成を目標に掲げている。旅客輸送はこうした政府の政策をも

とに整備されてきた。2004年にレギスタン号が旅客輸送として導入され、2011年にはタシュケント・サマルカンド高速鉄道がアフラシャブ号という名前で運行されることとなった。アフラシャブ号はスペインのタルゴ社の車両で、タシュケント、サマルカンド、ヒヴァといった主要な観光地を通っている。実際、運行開始から順調に需要を伸ばし、2012年には週5から毎日1本はしるようになり、現在では金曜、土曜、日曜は1日2往復している。私たち研修メンバーも、タシュケントからブハラ、ブハラからサマルカンド、サマルカンドからタシュケントと3回乗った。座席は日本の新幹線よりも少し広く車内には小型のテレビがつけられ、軽食も配られる。まさに快適そのもので、観光客とみられる多くの欧米人たちが乗っていた。しかし問題が1つあり、それはチケットの入手手段であった。それは私たちと同様、外国人観光客が直面する問題で、現地の駅で買うか予約するしかない。現地での購入だが、駅員が英語を理解していなかったりすでに売り切れていたりするためほぼ不可能といえる。このためウズベキスタン国外から予約する方法だが、webサイトか仲介業者に依頼して事前にお金を払い、現地でチケットを受け取るしかない。ウズベキスタン鉄道のwebサイトからだと送金規制に引っ掛かるため、現地の旅行代理店に依頼してチケットをとってもらい宿泊先などに届けてもらうのが一般的である。ただ旅行代理店のミスで現地に着いてから届かない、といわれることもあり、確実にチケットが手に入る保証はない。実際研修中も、あわやとどかないのでは、と何度も電話対応をすることになった。旅客輸送は、今後も観光局の増加とともに需要が見込まれるが、予約などのソフト面での外部とのアクセスが課題となっていると考えられる。

以上より、ウズベキスタンの鉄道を国外、国内の両面からみてきた。ウズベキスタンの経済成長とともに国外、国内での鉄道需要は高まっており、それに呼応する形で政府は積極的な政策を行い、鉄道を整備、拡充しているといえる。極めて明るい将来像が描けるだろう。しかし、2004年以降7~9%という高い経済成長率

を誇ってきたが、2017年には資源価格が下がり、ここ数年は5%台と低下しつつある。この経済の失速が一時的なものなのか、あるいは今後の不況の予兆なのかは分からないが、経済の動向がどこまでウズベキスタンの鉄道に影響するのかを今後ともに注視していきたいと思う。(行方皓哉)

参考文献

「ウズベキスタンの物流事情」 2013年1月 日本貿易振興機構海外調査部欧州ロシアCIS課 タシケント事務所  
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2019/03/41362e6bad0e3259.html> 2019/3/1 日本貿易振興機構 ビジネス通信



◀研修メンバーが乗ったアフラシャブ号。乗り心地は快適だった。



▼訪問先の住友商事に掲げられていた鉄道網をしめした地図。鉄道はこの地域で商売をやるのに必須である。

## ソ連の趣を残す美しき首都タシュケント

ウズベキスタンの首都であり、今回の研修でも最も長く滞在したタシュケントは、人口 200 万人を超える中央アジアで最大の都市である。旧ソ連時代にはモスクワ、レニングラード、キエフに次ぐ第四の都市として繁栄した。タシュケントはロシア人によって計画された都市であり、1966 年の大地震の後に大規模な再開発が行われて現在の姿に至る。そのため、タシュケントは現在でも道が広く、建物が一様に立ち並ぶソ連的な街並みが多く見られる。街を歩いていると、いたるところに警官の姿が見られ、今でもソ連の趣を残している。また、言語の面でも、首都タシュケントの人々の多くは現在でもロシア語を話し、街中にも多くの表示でウズベク語とともにロシア語が併記されている。今回の研修参加メンバーにはロシア語履修者が一人もおらず、英語がなかなか通じず苦戦した日々が懐かしい。

さて、突然ではあるがここからはタシュケントの地下鉄の話に移りたいと思う。タシュケントの地下鉄は旧ソ連時代の 1977 年に開業し、以来現在に至るまで営業されてきている。旧ソ連時代には核シェルターの役割で建設されたこともあり、軍事関連施設としての位置づけがなされていた。しかし、タシュケントの地下鉄は実はただの地下鉄ではないのだ。というのも、設計には著名な建築家や芸術家らが携わっており、地下鉄の駅と言われて思い浮かべる味気ないイメージとは正反対にとっても美しい駅が非常に特徴的である。車両こそソ連時代を感じさせる年季の入りのようだが、駅のデザインは天井ドームにイスラム絵画が描かれていたり、細かな模様を纏った大理石の柱が点在するなど、駅全体が芸術的な雰囲気を感じさせている。旧ソ連の雰囲気を感じながらも、ウズベキスタンならではの、イスラム文化も感じられる首都タシュケント、再訪の機会を心より期待したい。(副島 紘介)



MPJ Youth の研修で初めて、研修中に雪が降った。雪が降ると、タシュケントの町並みは少し幻想的になる。



タシュケントの地下鉄の地図



地下鉄の入り口の前で記念撮影。残念ながら、地下鉄内で写真が禁止か不明だったため、内部での撮影はできなかった。



インターネットから引用した写真。このように駅のホームは意匠に優れ、そこにウズベキスタンを象徴する水色の列車が到着する光景は芸術的。

高橋 愛理

## ウズベキスタンにおける男女差意識や宗教意識について

ウズベキスタンにおいて私が最初に興味を持ったのは食文化についてであった。というのも、外国に行って一番その国の個性を感じるのは食事であると思ったからである。特に中央アジアの方は同じアジアでありながら島国である日本とは全く異なる食文化の形態をしており大変興味深いと感じた。数あるウズベク料理の中でも代表的なのはプロフ (palov) と呼ばれる伝統食であり結婚式など式典で振る舞われることが多い。通過儀礼で用いられる点で彼らの生活に欠かせないものであるといえる。ここでは主に伝統食であるプロフに焦点を当ててウズベキスタンにおける宗教意識や男女間の意識について論じる。

まずプロフとは、お米を肉、スパイス、野菜で炒めたものであり肉には主に羊肉が使われることが多い。先に述べたようにこれは結婚式などでも振舞われ、調理するシェフは一般にオシュパズ (oshpaz) と呼ばれる。私ははじめオシュパズは職業の一種だと考えていたが、ウズベキスタンの方にお話しを伺うとプロフを作る人はみなオシュパズと呼ばれるということが分かった。作る人に名前が付けられている点でプロフがほかの伝統食とは一線を画しているということがうかがえる。

私がまず最初に興味を抱いたのは、プロフは一般的に男性が作るものであるという点であり、当地人らに話を聞くと実際女性よりも男性の方が作ることが多いとのことであった。その理由を伺ったところ、以下の2点が挙げられた。

まず一つ目は大きな式典の際に大勢のプロフを作る場合大きな釜で炒めることが多い。そのプロフをかき混ぜたりその鍋を扱ったりする場合に男性の方が力があるので素早く調理できるとのことである。次にその味についてである。男性が作る場合と女性が作る場合では味に差異が見られ、女性が日々の家事に追われながら作るプロフよりも、男性が集中して作るものの方が美味しくできるからという理由が挙げられた。これはもちろんお話しを伺った方の一意見であると思うが、数人がそのように述べていたためウズベキスタンではそのように言い伝えられているのだろうと感じた。この話を伺う際に皆が口を揃えて言うのは、そこに男女差別の意識はないということである。ウズベキスタンは比較的男女の扱いの差などは見受けられず、オシュパズなど男女比が偏るような場合でもみなそういうものだと割り切っているように見受けられた。私はこのような姿勢に女性差別問題における糸口が見えたような気がした。男女差別というよりも男性は力が強いからという理由で男女比が出るのは至極全うなことだと考える。しかし2つ目の理由に関しては女性が家事をするものであるという考えのもと成り立っているため一概に女性差別の意識がないとも言えないのが現状である。

そして次に私が現地の人に尋ねたのはウズベキスタンにおける宗教意識についてである。ウズベキスタンではイスラム教の割合が90%以上を占め、その多くがスンニ派である。その他にロシア正教会やキリスト教なども存在する。

まず初めに述べたいのはウズベキスタンにおいて宗教同士の衝突はないということである。春にはナウルーズというお祭りも開かれムスリムもキリスト教も関係なく春の訪れを祝うという。そんな寛容な姿勢を見せるウズベキスタンの人々にイスラム教の戒律に関わる飲酒や豚の飼育などについて尋ねた。サマルカンド外国語大学でお話を伺った学生の中にはスンニ派の方もシーア派の方も存在し、それぞれにお話しを伺ったところ、飲酒などを行うムスリムはイスラムの戒律を知らないかもしくは悪行を働かなければ戒律に背いてもいいという意識があるのではという意見をいただいた。しかしそれほどそういった人々を敬遠している様子はなく、また豚の飼育に関しても食べなければ問題はなしとのことでありウズベキスタンは色々な意味で宗教に寛容な国であると感じた。

この研修全体を通して感じたのはウズベキスタンの人々が多様性を尊重しているということである。世界的にも宗教や民族対立が問題になっている昨今、彼らはある意味でのステレオタイプは持ちながらも他を許容する姿勢も持っている。それによる信仰心の薄弱化やウズベキスタンにおける国としてのアイデンティティは失われておらず、ちょうどいい塩梅で調和していると感じた。食事や建造物など国民色は強いもののそこに私の想定していたコンフリクトは存在せず、宗教や男女に対する意識に関して私が考えていた推論とはほとんどすべて真逆であったことが分かった。こうして現地に赴いて地元の方々に話を聞くことで、本やネットでもわからないような生の声が聞けたことはとても有意義であり、ウズベキスタンについて学ぶ研修でなければ得られないことであると感じた。これからもウズベキスタンをはじめとする中央アジア諸国に目を向け知見を深めていきたい。



◀プロフを作っている最中。  
大きな釜で男性が作っている。

岡田 悠乃

## 現代のシルクロードが ウズベキスタンに及ぼす影響

ウズベキスタンの都市、サマルカンドやタシケントは古くから交易の要所として栄えていた。誰もが一度は耳にしたことがあると思われるシルクロードは、これらの都市を通る交易ルートのことである。シルクロードの存在は各都市の発展に大きく寄与していたとされる。それでは、現在はどうか。2013年に中華人民共和国の国家主席、習近平が提唱した経済・外交圏構想「一帯一路政策」は、中国西部から欧州までを結ぶ「シルクロード経済帯」の構築を目的の1つとしており、その中継地であるウズベキスタンに影響を与えることは明らかである。そこで本稿ではまず、過去のシルクロードとウズベキスタンの各都市との関わりを見ていく。そして「シルクロード経済帯」を現代のシルクロードであると設定し、その影響について予測した上で、現地機関のレポートや現地でのアンケートを元に現状を考察する。最後に、今後のウズベキスタンと現代のシルクロードとの関係性について考える。

シルクロードはユーラシア大陸の北緯30度～45度に沿った、オアシス都市を中継する東西貿易のルートであった。東方のシルクを始めとした、西方世界では珍しい産物がもたらされたことが名前の由来で、8世紀に海上交易路にとって代わられるまで盛んに活動が行われていた。具体的には、各都市の市場は、都市民の作る陶器や金属器、地元の農業生産物、遊牧民の皮革製品、シベリアの毛皮、インドの香辛料、そして中国の絹など様々な物品が持ち込まれ、東西南北の隊商貿易が交差する一大国際交易場

となっていた。商業活動は活発化し、モノの入手が容易になるほか、人や金、情報の集積地としても役割を果たし、学問を大成したり、都市のインフラを整備したり、多地域を繋ぎ多文化が融合して新文化を創造したり、文化的多様性が生まれたりと都市を強大化させ、各都市の求心力を高めていった。戦闘も相次ぎ、支配者は次々に交代したが、各都市を政治の中心地とするなどしてその存在感は保たれていた。

その後も様々な歴史を経て、現在、新しいシルクロードが築かれ始めている。この新しいシルクロードの概要としては、中国の発表によると、「今後数十年かけて道路や港湾、発電所、パイプライン、通信設備などインフラ投資を皮切りに、金融、製造、電子商取引、貿易、テクノロジーなど各種アウトバウンド投資を進め、当該経済圏における産業活性化および高度化を図るプログラム」とされている。実際、中国とウズベキスタンの間では、既に天然ガス輸送インフラ（パイプライン）建設、石油・天然ガス鉱区開発の技術サポート、鉄道建設、機械・灌漑設備などへの融資、皮革製品等の工場進出など多くのプロジェクトが進められている。では、これらはどのような影響を持つであろうか。中国製品の大量流入により国産品が圧迫されることはあるか。中国依存が進むことで文化的多様性は保たれるのか。また鉄道建設等により運輸時間が短縮され、ウズベキスタンの各都市が通過点に過ぎなくなるとすれば、都市の求心力は下がるのか。以下ではこれらについて考察していく。

ウズベキスタンの主要国別輸出入

〔単位：100万ドル、%〕

	輸出(FOB)		輸入(CIF)	
	2016年	2017年	2016年	2017年
	金額	金額	構成比	伸び率
中国	1,899	2,249	15.1	12.9
ロシア	1,385	2,120	15.2	18.1
カザフスタン	545	1,072	7.7	13.4
トルコ	688	878	8.3	27.9
アフガニスタン	517	618	4.4	19.0
イラン	358	287	1.9	△20.7
タジキスタン	165	195	1.3	12.9
キルギス	121	180	1.3	47.8
フランス	120	149	1.1	23.9
韓国	202	143	1.0	△29.0
日本	18	14	0.1	△8.3
合計(その他含む)	12,095	13,035	100.0	15.2

	輸出(FOB)		輸入(CIF)	
	2016年	2017年	2016年	2017年
	金額	金額	構成比	伸び率
中国	2,254	2,729	20.9	21.0
ロシア	2,398	2,709	20.8	13.0
韓国	869	1,244	9.5	43.2
カザフスタン	654	998	7.6	4.8
トルコ	486	679	5.2	39.0
ドイツ	492	587	4.5	19.4
ブラジル	355	321	2.5	△9.6
インド	319	291	2.8	△8.5
リトアニア	378	280	2.0	△26.7
ウチビア	242	213	1.8	△12.1
日本	248	177	1.2	△28.6
合計(その他含む)	12,138	13,035	100.0	7.8

(注) サービスを含む。

◀ 中国、ロシア、トルコ、カザフスタンなどで、輸出入の伸びが著しい。

(出典) ウズベキスタン国家統計委員会、2018年JETRO発行のレポートより転載



◀タシケント プロフセンターにてヒアリング実施

JETRO が 2017 年に発行したレポートには、中国企業の中央アジアへの進出は著しく、中国製品は中央アジアの国民に広く浸透しているという旨の記述があり、実際、ウズベキスタンには現在、約 900 社のロシア企業に次いで約 700 社の中国企業があるといわれている。2016 年に急逝した大統領に代わって着任したミルジヨエフ大統領は、外貨規制緩和等ビジネス環境を整えることに尽力し、参入してきた外資企業が円滑に活動できるように配慮している。一帯一路の影響について考えると、輸送インフラの建設に関しては、ウズベキスタンの税増収や輸出先の多角化、外貨獲得や就業機会の創出など様々な良い影響が挙げられている。一方で、政府による規制が大きく円滑にプロジェクトを進められないなどの記述も多く、他分野における規制緩和が行われた後の資料は見られなかった。次に、前項の JETRO の作成した表を参照してほしい。輸出入両面において中国の金額・構成比が大きく、伸び率も著しいことがわかる。中国製品の大量流入という記述にも頷ける。しかし、ここで他国についても見てみると同じように伸び率を上昇させており、新大統領による規制緩和が要因となっている可能性も無視できない。中国製品だけが大量に流入しているわけではないのならば、ウズベキスタンにおける日用品が画一化され多様性が失われる、というのは杞憂かもしれない。

実際に、研修中にウズベキスタンのタシケント、サマルカンド両都市において、無差別に対象者を選び、ヒアリング調査を行った。サンプル数が 20 弱と少なく、信憑性に問題はあるものの、「中国人居住者や中華街が増えたと感じるか」という質問には全員が「いいえ」と回答した他、「中国製品と国産品が並んでいる時、どちらを選ぶか」に対する回答は概ね半々で、「携帯電話や電化製品などは信頼できる韓国製品を購入する」というコメントも見られた。以上から、中国製品が国産品を圧迫しているとは現状言い難く、かつ昔から集団移住等で関係の深い韓国のプレゼンスが大きいこともあって多様な製品が展開され、安直ではあるが文化的に画一化されるとは考えられないという結論に至った。また、住友タシケント事務所で伺った話によると、ウズベキスタンは中央アジアのハブとして機能しており、一帯一路政策で鉄道が建設され中国から欧州への道の通過点になりうるとしても、昔のように様々な物品の集積地として機能し、通過点としてのプレゼンスを保ち続けていくと予想されているようだ。新大統領による規制緩和政策も、多くの外資系企業がウズベキスタンを軸として中央アジアで活動することに寄与する可能性が高いため、求心力が減少するとは考えられにくいだろう。

今後も一帯一路政策が進められていく中で、ウズベキスタンは中央アジアの中での規制緩和等先進国として経済的活動の規模を広げ、核となっていくことが望ましい。しかしその中で、無秩序に外資系企業を参入させてしまうと、長期的に文化的多様性という特長が失われることになりかねない。特に、今後着実に上昇する中国のプレゼンスについては看過すべきではないだろう。中国政府が一帯一路政策を win-win の関係で創る「国際的公共財」という通り、適切な形で恩恵を受けるためにも、闇雲に規制緩和を進めるのではなく、国内産業の保護や定期的な監査なども実施していくべきだ。

## 思い出のタクシー【前編】

研修中、おそらくメンバーにとって最もストレスがかかったのが「タクシー」であった。通常のアフリカ研修とは異なり、ウズベク語やロシア語と言った言語面、安心できる仲介業者やサービスの不在、ウズベキスタン国内の法的な部分から事前に、しかも良心的な料金でタクシー等の“足”を確保するのは難しかった。まして研修メンバーは自分を含め 9 人である。9 人が乗れるような中型のバンが借りられたらよかったのだが、それができなかったため、結局、タクシーをその都度使うことになった。

具体的には、宿泊先は決まっていたため、その宿泊先経由で空港とホテルまでのタクシーを予約し、ホテルから訪問先の機関・観光地までは適宜交渉することになった。タシュケント空港を出て、「さあ、これから研修!」といった時に目に入ってきたのはあふれんばかりの人。手にはなんだか読めないプラスチックカードをもって研修メンバーに押し寄せ、片言の英語でどこまで行くのかと聞いてくる。真夜中の見知らぬ土地で、しかも何を言っているのか分からない人々に囲まれて、どうすればいいのかわからなかったメンバーたちはさぞ不安だっただろう。ともかく自分はメンバーに指示を出して、人ごみを無視してかき分け、予約してあったタクシーを探すこととした。数分歩いたところで、自分の名前を呼ぶ一団に出くわした。どうやら予約したタクシーらしい。タクシーは 3 台あり、それぞれ 3 人ずつ乗ることになったため、急ぎよ上級生と下級生のペアをつくり乗り込んだ。何台かで組む時はタクシー運転手の 1 人が指示役となって運転中もスマートフォンで他の運転手に行き先や道を教えているらしく、自分はこれ以降タクシーに乗るときは指示役の運転手のいる車の助手席に乗ることとなった。不安の中、ホテルについてみると 1 台いない。運転手が間違えて他のホテルに連れて行ったらしく、結局、10 分後には無事到着した。何とか到着できた、とほっとしていたが、この後 1 週間、タクシーについては悩まされることになった。

2 日目は前日のタクシー運転手と whatsapp と電話を使って連絡を取り合い、1 日中レンタルすることにした。訪問先の機関がいくつかあったため、何時にどこ集合を毎回伝え、値段交渉をした。その甲斐もあって 2 日目は無事終了し、機関訪問も予定通り終えることができた。しかし高い。このままでは予算を超えてしまう。研修で、しかも言語も通じない中央アジアで金が尽きることは最悪を意味している。2 日目の夜は、ホテルの人の助けを得つつ研修副代表の岡田と電話をあちこちにかけ、今後の対応を練り直すこととなった。(行方皓哉)

島本 高志

## ウズベキスタンの電力政策について

日本において事前に調べたとき、ウズベキスタンは施設の老朽化等は進んでいるものの周辺諸国の中でも有数の発電能力と先進技術の取り込みに成功しているとされ、かつ、日本からはODAにより発電運用保守と円借款による発電所の建設など、ハード面だけでなくソフト面を通じて支援が行われていることがわかった。一方で日本におけるウズベキスタンの資料は最新のもの少なく古い物が目立つようであった。そのため本稿では現地での電力の実情や日本のODAがどのように行われているかに注視してウズベキスタンの電力政策についてお伝えしたい。

まずはウズベキスタンにおける電力事情であるが、事前に調べた限りではJETROのレポート等で停電等は発生するものの稀であり、電力事情は比較的良好とされていた。また、我々が現地において滞在する間は少なくとも一度の停電もなく、現地のJICAで御話を伺った時も、「故障や計画停電によるものであり、復旧も早いのでたいしたものではなく、現状経済の発展を阻害していない」というように伺った。だが、住友商事で御話を伺った際は「停電は珍しくなく電力事情はあまり良好とは言えず、タシケントはまだ良好な方であり地方都市ではかなり酷いと聞く。停電がひどいと工場等の安定した稼働が危ぶまれ進出にこの足が踏まれる」という風に伺った。このように、ウズベキスタンの電力事情は全体的には確かに良好であったが、その内実は生活水準等に支障をきたさない程度には良好だが、少なくとも外国企業が工場建設等の

進出を考える際には依然として未熟なものであるという見えない幅を孕んでいた。

またウズベキスタンにおいては近日省庁を改組しエネルギー省が設立されるということだったが、こちらの行政改革については日本での事前調査では理由が見つからず、何か行政機構が問題を掲げているものと考えられていた。だが現地において機関訪問の際に質問した結果、これはウズベキスタンにおいてソ連崩壊直後より死去まで大統領の座にあった前大統領カリモフ氏が二年前に亡くなったのち、現大統領ミルズィヤエフ氏が国全体で行っている改革の一環であり、現状の組織も少々形態は古いが機能的に動いており現状問題があったわけではないことが判明した。この国全体の改革はウズベキスタン社会全体へ非常に大きな影響を及ぼすものであり、経済活動にも多大な影響を及ぼすものようだった。この点においてはJICAのみならず住友商事の方でも注視されているらしく、特に為替政策の変化や法制度の充実が外資に対する事実上の規制緩和であり、これにより新たな商機が窺われているとのことである。

また、ウズベキスタン政府自体も外資に対し投資を期待しており、実際にアメリカの有力ファストフードチェーン「ケンタッキー・フライドチキン」の電撃出店が行われるなど具現化も進んでいるという。そのような状況下において、現状のような電力事情は近いうちに始まるだろう外資のより一層の参入の際にはその足かせとなり、ひいては経済発展の足かせとなりそうなことが推測された。



▲▼ 光り輝く夜のタシケントの道。



だが、一方でウズベキスタン政府は現状を無策に眺めているだけではない。前述の通り日本の対ウズベキスタン ODA において重視されているのは電力支援であるが、それがどのように決定されているのか事前には知らなかったため、世界各地での原電の売り込み等もあり、日本が売り込んだものと推測していた。また、その目的としては外務省の国別開発協力方針の資源確保の文字より主に現地における豊かな資源だと思われた。

だが、JICA において伺った話では ODA は「受ける側の国が打診して日本が受容する」プロセスによって成立しているという。この話に従うならば、ODA にまつわる一連の流れは日本が推進していたというより、現状のウズベキスタンにおいて電力事情は外資呼び込み等の際に力不足の状況にあるものの、その状況を見越したうえで数年前にウズベキスタン政府が日本に電力支援について打診したことになる。

実際に前述の国別開発協力方針においてもその支援内容としてウズベキスタン政府の方針に沿う形でのウズベキスタンの経済インフラの整備更新やビジネス環境の改善の旨も明記されており、また先の組織改編の話の際も、改革の目的は「より現代的でスムーズな組織運営による将来的な発展や電力配分党の決定と組織改革による海外へのアピールを通じた投資の呼び込み」が目標であるという風に説明されていた。これらよりウズベキスタン政府は当初考えていたよりもはるかに将来を見据えて長期的な計画をもって電力事情の改善等に取り組んでいたらしいことや、またそれが巡り巡って日本企業の進出や日本企業が現地との商談による資源買い付け等を行うための布石となっているらしいことがうかがえる。

また、その支援の内容に関しても一見日本が強く推進しているために内容が人的資源の育成というソフト面から発電所というハード面へ多岐にわたり推進されているように見えていたが、これは日本の支援が税金を基としており建設後も確実に施設を稼働し続ける必要があるため単純に必要なだけだったようだ。だが、これこそが日本の支援の強みでもあり、支援に確実な成果を残す点で中韓等の支援と異なるという。

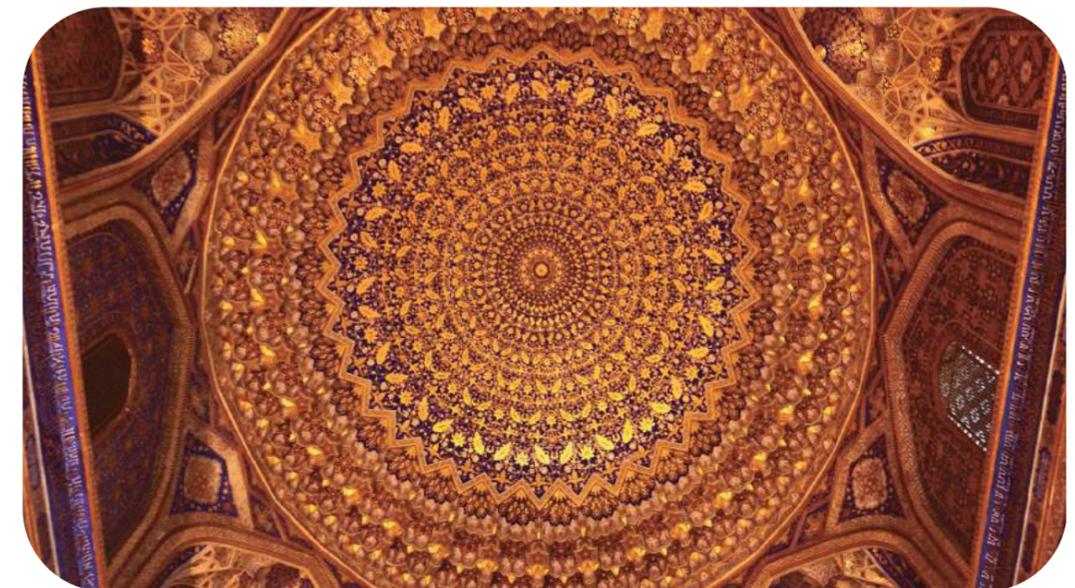
このように、ウズベキスタンでの電力の現状は思っていたより未熟であったが、ウズベキスタン政府の電力政策は、現実をきちんと把握したうえで将来の発展とそれに必要となる電力の必要性を見据えたうえで確実な支援を受け入れ着実な完成を目指す志向で行われているらしいというのが、今回の研修を通じた個人的な結論である。



◀タシュケントにある、中央アジアで一番高いテレビ塔。夜はこのように光り輝くが、改めて電力の重要性を認識させられる。



### Photo Gallery



副島 紘介

## ウズベキスタンにおける 外国企業進出の現状

今回のウズベキスタン研修では、「ウズベキスタンにおける日本企業を含めた海外企業の進出」を個人研究のテーマに設定した。まずは本テーマ設定に至った理由を説明したいと思う。まず1点目としては、日本企業の進出数の少なさについて。ウズベキスタン国内では多くの海外企業が進出しており、中国・韓国の進出企業数はともに400社台と非常に多くの企業が進出している。一方、日本企業は2018年時点で21社とかなり少なく遅れているのが現状である。この大きな差はどこから生じているのか、日本企業の進出と中韓企業の進出の差を生む要因について疑問を抱いた。そしてもう1点、ウズベキスタンのビジネス環境の状況について。ウズベキスタンでは独立以降カリモフ前大統領のもとで外貨規制が厳しく行われており、外国企業の進出を長らく阻んできた。しかし、2016年にカリモフ前大統領が死去しミルジヨエフ大統領となると、外貨の持ち出し規制の緩和や法人税の引き下げなど外国企業のビジネス環境の改善がなされてきている。それにもかかわらず日本企業の進出があまり進んでいないことに疑問を抱いた。以下本文では、ウズベキスタンで住友商事やJICAの方に伺ったお話や、実際に現地で得た情報などをもとに以上2点の疑問を明らかにし、日本企業のウズベキスタン進出の今後について展望を示すことで研究報告としたいと思う。

まずは1点目について、中国企業と韓国企業の進出数の多さ、そして日本企業の進出数の少なさにはそれぞれ異なる要因があるようだ。

中国企業の進出については、地理的な要因と市場における中国製品の強さが挙げられる。中国はウズベキスタンと国境を接してはいないものの、陸続きの位置にあり、製品などの輸送において他国よりもハードルが低いと言える。実際建設資材や中国製品など多くの物品が陸上ルートを通じてウズベキスタンに運ばれている。またウズベキスタンは中国が掲げる一帯一路政策においてシルクロード経済圏に含まれており、経済インフラ整備など様々な経済面において中国の影響力が増大していることも理由として挙げられるだろう。また、発展途上国であるウズベキスタンにとって、中国製品は安価で購入しやすく、品質もそこまで悪くないという点でウズベキスタン国内においてそれなりに高い競争力を持っている。韓国企業の進出については歴史的な背景が大きいようである。ウズベキスタンでは旧ソ連時代にスターリンによって多くの朝鮮系の人々が強制移住させられ、現在でも約20万人もの朝鮮系の人々がウズベキスタン国内に居住している。このような歴史的な背景から、ウズベキスタンから韓国へと向かう出稼ぎ労働者が多い、など両国の経済的な結びつきは強く、韓国企業の進出を容易にしていると考えられる。大韓航空とアシアナ航空によるソウル～タシュケント間の定期運行便が週6便の頻度で運行されていることも両国の関係性の強さを示していると言えよう。以上の中国、韓国企業の状況に比べ、日本企業の製品は非常に高価である上に、陸路輸送にかかるコストが高すぎることで日本企業の進出を難しくしているのは事実である。これらの状況の違いが、中韓と日本

の企業進出の差を生んでいると言える。また、そのほかの国として、数は不明であるが、旧ソ連地域であるためにロシア企業も多く進出している。

次に2点目、ウズベキスタンのビジネス環境の改善について。カリモフ前大統領が死去し、現在のミルジヨエフ大統領が就任して以来行われてきた外貨規制の緩和などのビジネス環境改善の取り組みは確かに効果をあげているようだ。外資系企業が進出する上で最大のハードルとなっていた外貨の持ち出し規制は緩和され、法人税も引き下げられるなど、外国企業にとってのビジネス環境は改善していると言える。それにも関わらず日本企業の進出が依然として進まないのは、外貨に伴う問題だけではない多くの問題が障壁となっているからであるということが分かった。途上国でよく見られる問題ではあるが、政府が公表している統計の信憑性の低さ、書類手続きなどの実務手続きの複雑さなどの問題も依然残されているようだ。また、日本企業に関して言えば、ウズベキスタンへの進出の前例が少ないために、どのような投資をしたらどのくらいの利益が得られるのかというリターンの予測が立ちにくいことも、日本企業の進出が今ひとつ進まない大きな要因であるようだ。

最後に、日本企業進出の現状と今後の進出の展望について説明することで本報告書の結びとしたいと思う。これまでウズベキスタンで行われてきた日本企業による事業のほとんどはODAなどの公的資金案件が中心であった。ナヴォイ火力発電所近代化の有償資金協力などがその例である。しかし、ミルジヨエフ大統領による近年のビジネス環境改善により、いすゞによる大型トラックの販売事業、住友商事によるトヨタ車の販売代理事業などの民間企業による直接投資事業が増えてきている。徐々に増えつつある日本企業のウズベキスタン進出が一層進むことで、ウズベキスタンにおける収益の予測も立ちやすくなり、日本の民間企業による直接投資も拡大していくと思われる。ウズベキスタンは中央アジアで最大の人口を抱える国であり、また途上国として今後の成長が見込まれる国であるために、日本企業にとって市場としての魅力は大きい。また日本とウズベキスタンの両国関係は良好であり、政治・経済に留まらず、文化など幅広い分野において相互交流が見られる。日本政府によるウズベキスタンにおける多くのODA案件の実績、JICAによる国際ボランティアも多くウズベキスタンに派遣されていることなどもあり、ウズベキスタン国民の対日感情も比較的良好であると感じられた。このように日本企業の進出を後押しする要素も多く、先に述べた統計や手続きの煩雑さなどの問題点が改善に向かうことで、今後日本企業の進出が進み、両国の関係が一層進展していくことを期待したい



▶2016年4月30日の日・ウズベキスタン外相会談の様子。ミルジヨエフ新政権の下での二国間の経済交流促進に合意した。

## ウズベキスタンのバザール

今回のウズベキスタン研修では、2つのバザールを訪れた。タシュケントのチョルスー・バザールと、サマルカンドのシヨブ・バザールである。バザールと聞いて、どのようなものを思い浮かべるだろうか。日本でも親しみのあるこの言葉からは、にぎやかな市場が思い起こされたいだろうか。実際にこのバザールが意味するのは、様々な店が立ち並ぶ市場である。バザールとは、もとはイスラーム圏に特有の市場のことである。ペルシア語の bazar が語源で、アラビア語ではスークと呼ばれる。伝統的なバザールは布教のための宗教活動とかかわりがあったためにモスクの知覚に設けられ、ふつう同一業種で1つのバザールがつけられた。このバザールはのちにヨーロッパに伝わり、本来の意味の他に百貨店や商店街といった意味を持つようになった。英語で雑貨市や慈善市といった意味をもつバザー bazar、bazaar もこれが語源である。

さて、今回我々が訪れたバザールは、どちらも本来の意味でのバザール、つまりは賑やかな市場だった。愛想のいい店主たちが、ドライフルーツや生肉、野菜からおみやげ物に至るまで、様々な商品を売りに出していた。とはいえ、観光客向けというよりは現地の人々の日用品売り場といった感じで、日本には持ち帰れないような商品も多く、設備もホテルなどに比べやや不衛生だった。例えばチョルスー・バザール内のレストランでは、諸語れたカップがそのまま出てきたりした。バザールで食事をする場合には、多少の覚悟が必要だろう。とはいっても、現地人向けであるが故の楽しみもある。個人経営の商店ばかりなので、値下げ交渉に応じてくれたり、おまけをつけてくれたりと、なかなか日本では味わえない体験もできる。特産品のアンズなどを安く手に入れられるのも魅力だ。何より、現地での生活を肌で感じられるのは他では体験できないいい気な魅力だ。

前述のとおり、我々は2つのバザールを訪れたが、其々に特色があった。チョルスー・バザールの方はといえば、さすがは首都のバザールといった感じで、活気がありにぎやかな市場だった。バザールは大きなドーム型の2階建ての建物に囲われていて、一階には生肉などの生鮮食品、二階にはナッツやドライフルーツなどの保存食が売られていた。地下にはレストランや公衆トイレも併設され、長い時間買い物することもできる。建物の周りにも野菜や果物などの食品、それからお菓子や土産物の出店が並んでいた。サマルカンドのシヨブ・バザールは、これに比べるとやや人が少なく落ち着いた印象を受ける。簡易テントの下にある屋台の売り子たちも、チョルスーに比べるとおとなしく、客引きも少ないのでゆっくりと買い物を楽しめる。チョルスーより規模は小さく感じられたが、チョルスーとは違った魅力があった。どちらのバザールも、時間的制約のために長くいることはできなかった。しかし、少しでもバザールの活気に触れられたのは良い体験になったし、どちらのバザールもそれぞれの違った魅力を味わうことができた。現地の生活が垣間見えるバザール。是非、ウズベキスタンに行く人にお勧めしたい場所である。(山根 佑斗)



チョルスー・バザールの中心に位置するドームの内部。精肉市場となっている。



シヨブ・バザールの入り口。

桐原 萌恵

## ファッションの多様性と 伝統衣装の保護

ウズベキスタンでは古くから長らくイスラム教が信仰されているが、1991年の独立までの間に受けたロシアやソ連の影響により革新的な西洋風の考え方が浸透することとなった。それと同時に街中を歩く人々の服装も多様化した。ソ連の影響により、ファッションもより多様に、より開放的になった他、今までは手作業で行われていた染付けの技術や刺繍、また糸を折る技術が機械に転換された。まずは初めにそのような社会・政治体制の変化に応じてどのようにファッションが移り変わったのか、また変換期に文化面でどのような問題が浮き上がったのかを述べたい。

1920年代のウズベキスタンでは、女性は皆パランジと呼ばれる伝統的なイスラム教のヴェールを着用しており、頭から妻作まですっぽりと隠れるようになっていた。しかしソヴィエト政権のもとで1920年代後半から社会主義国家設立のためにイスラームの慣習と伝統を根絶するキャンペーンが始まり、その中で女性解放運動も始まった。そのようなキャンペーンの影響で、パランジを放棄することが正しいウズベク人であるために必要だという認識が広まっていった。(帯谷、2015)

この女性たちの服装の変化に対し、保守的なウズベク人たちの間では頻繁に暴動が起こった他、パランジを捨てた女性に対する身内からの暴力も頻発したようだ。伝統的なイスラム文化を守りたい保守派からの反発も度々起こりましたが、長い時間をかけて女性の装いは変化し、

1980年代ごろになるとそれぞれが思い思いの服を着る様になったという。

しかしソ連が解体すると独立の流れの中で伝統に戻ろうとする志向が強まり、再び「ヒジョブ」というヴェールが復活した。

以上の歴史的背景から、ウズベキスタンのファッションが変化し続けてきたことがわかる。その様に文化が移り変わっていくウズベキスタンにおいて、伝統的織物イカットは今日常的に着用されているのか、どのようなイメージを持たれているのかを現地で調査することにした。

### 【現地で知ったこと】

ウズベキスタンの伝統織物について調べる中、タシュケントに拠点をおき世界にマーケティングをするアパレルブランド「ビビハヌム」を知った。今回の研修では幸いにしてこのオフィスを訪れ、社長であるMuhayo Alieva(ムハヨ・アリエワ)さんにお話を伺う機会をいただいた。ビビハヌムは2006年に設立され、タシュケントやフェルガナ谷、またナヴォイ地方にすむ多くの女性に仕事の機会を提供する他、国内外でのマーケティング、インターネット販売や外国での展示会を通してウズベキスタンの伝統的織物であるイカットの良さを広めている。

ビビハヌムの衣類は、材料である糸を染め、縫い合わせるまで全ての行程が手作業で行われているためどうしても値段が張ってしまう。その為に国内の人が日常的に着るために、とい



うよりは外国の人向けで作られているようだ。実際に製品を買う顧客も外国の方が多い。国内の人が伝統的な布を買う際は、完全に手作りのものから工場生産された安いものまで多様な選択肢がある。国内での売り上げも多少はあるが、やはり国外からの注文の方が多いという。ウズベキスタン国内で売るよりも、外国に伝統的なウズベキスタンの衣装の良さを伝え、ハイエンドファッションの一つとして売り出すことで比例的にウズベキスタン国内での評価も上がるという。その結果、一昔前は伝統的なものを古いものとみなしていたが、今では逆にむしろその伝統を取り戻そうという動きの方が盛んになっているという。

サマルカンド外国語大学の生徒にファッションについて少し日本語で質問する機会もいただいた。「イカットを日常的に着るか」という質問に対しては、「お祭りや結婚式など大切な行事の時に着る」と教えてくださった。また、「イカットを着るのは好きかどうか」という質問に対しては生徒は皆頷いていたので、肯定的であることが分かる。インタビューに協力してくださった学生の方々は皆女性であったために意見に偏りがある可能性があるが、何れにせよ伝統的織物に対してはポジティブなイメージを持っていることが伺える。

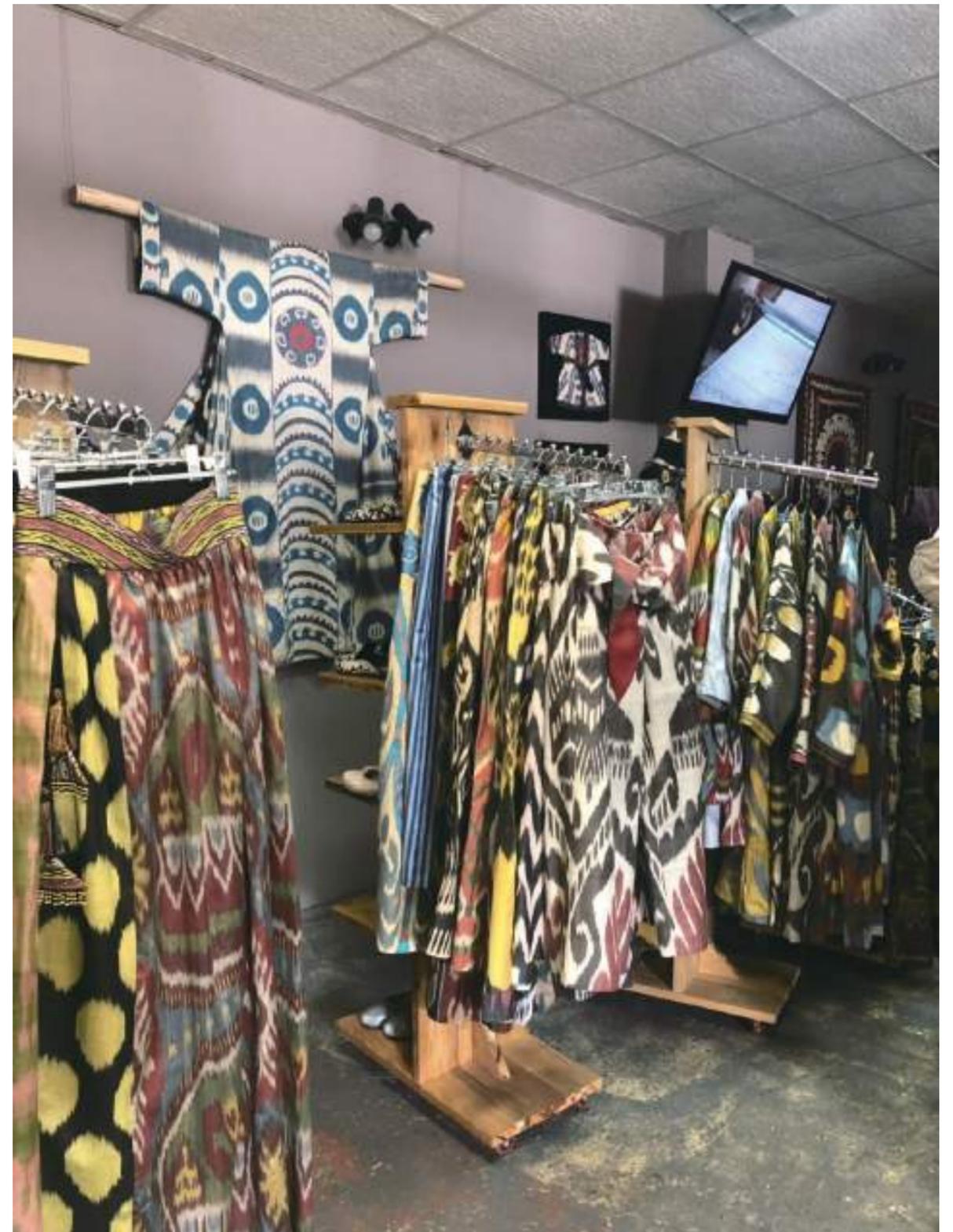
「今回イカットについてインタビューできたのは伝統文化を復興しようという動きの中で育ったであろう20歳前後の女性だけだったので、一概には言えないが、今回の研修の中でお話を聴く限りでは、イカットに対する印象は一貫して肯定的なものだった。」

### 【感想】

ウズベキスタンのファッションの推移を歴史的視点から見つめることで、国民の90%がイスラム教徒である国でのこのような服飾の多様性が生まれた背景には、社会的な体制の変換とソ連時代の共産党の指導があった事を知ることが出来た。また現地で伝統的衣装に対する意識を限られた人数ではあるがインタビューした結果それぞれが伝統文化を守っていこうという意識を持っていることがわかった。研修中の実感としては、タシュケントでは現代的な服を着た人が多かったが、サマルカンドやブハラではより多くの人が美しい織物を身にまとっていた。そして若者よりも歳を重ねた方々の方が多く着用していた。独立後に伝統文化保護の動きがあったこともあり現在はファッションに多様性が見られるが、来たる数十年の間に変化が見られるのかどうか注目してゆきたい。

### 参考文献

- ・帯谷知可. "[研究報告 5] 社会をよそおうオンナたち：ウズベキスタンにおけるイスラーム・ヴェール今昔." (2015).
- ・帯谷知可. "<報告 2> ルモルとヒジョブの境界 - 社会主義的世俗主義を経たウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題." (2018).



▲伝統的工芸品イカット

岸野 桜子

## ウズベキスタンと日本の文学を通じた交流

文学を通して世界を知り、文学の持つ力で人と人を結びつけることはできないか。私はこのことに関心を持っている。そこで、今回のウズベキスタン研修は、ウズベキスタンと日本の文学を通じた交流をテーマとした。

ウズベキスタンでは日本語教育が盛んである。タシュケント国立東洋学大学、サマルカンド国立外国語大学などの大学の日本語学科やフェルガナ州リシュタンにある NORIKO 学級という無料の日本語学校など様々な場所で日本語教育を受けることができる。日本語教育の過程で日本文学が読まれているのかどうか、ウズベキスタンの学生がどんな日本文学を読んできたか、ウズベキスタンの子どもがどんな文学に触れてきたかの3つの視点から文学を通じた交流について考察したい。

### 【日本語教育と日本文学】

ウズベキスタンで日本語教育が盛んだが、日本語の習得を主眼としており、文学はあまり学ばれないのではないかと、という疑問があった。サマルカンド国立外国語大学で日本語を学ぶ生徒、日本語学校 NORIKO 学級のガニシエル校長先生と生徒と交流し、このことについてお話を伺った。

サマルカンド国立外国語大学には、通訳などを育てるという目標のもと、2006年に日本語学科が設立された。日本語だけではなく、日本文化も学んでいる。教室の本棚は日本で目にする

ような日本の歴史に関する本や近代文学がずらりと並んでいた。この学校の生徒たちにどのような日本文学を知っているかを尋ねたところ、竹取物語・源氏物語・古事記など古典を中心とする作品名が返ってきた。日本人作家については紫式部、清少納言、井上靖、大江健三郎を知っていた。授業でこれらの文学を学んだようだ。短歌、ことわざも知っていた。NORIKO 学級の教室にも絵本もあり、言語を教える際には必ず文化を教えているようだ。

### 【ウズベキスタンの学生が触れてきた日本文学】

生徒たちが「漢字は難しく、日本語を勉強するときに苦労する」と話していたことから、授業外でも日本の本を読んでいるのかと気になった。サマルカンド国立外国語大学の生徒たちからは、NARUTO、DORAEMON、ATOMなどの漫画が好きで読むという答えが返ってきた。映画「おしん」がウズベキスタンで放映されたことを話題にすると、みんなおしんを知っているようだった。ウズベキスタンも日本も家族を大事にするところが似ているそうなので、共感を産み、触れやすい作品なのかもしれない。文字よりも絵、映像を通して訴えかける漫画や映画は文学に興味を持つためのきっかけになっているのではないかと感じた。日本文学についてどう思うかを質問したところ、言霊思想や少しの言葉で多くの意味を含むところが特徴だという回答があり、味わって読んでいることを感じた。NORIKO 学級の生徒たちは、古典や桃太郎などの日本の昔話をよく知っていた。漫画も読む

そうだ。また、年上を尊敬するところなどウズベキスタンと日本は精神的に似ているところが多いと話してくれた。

### 【ウズベキスタンの子どもの触れる話】

NORIKO 学級の生徒たちに、子供の頃に本を読んだり、よく聞いたりしたウズベキスタンの物語はあるかと質問した。NORIKO 学級の生徒の一人は、昔話を家族から聞くこともあったがどんな話をしていたかは忘れてしまったと言っていた。祖父から、第二次世界大戦の時の話を聞かされたことはよく覚えていると言っていた。体験に基づいた家族についての話も多くらしく、親から子に話を語り継ぐのは日本と同じだと感じた。その生徒に本を読む習慣はあまりなかったらしいが、「おおきなかぶ」の物語をよく覚えていると言っていたので、ロシア文学には馴染んできたのかもしれない。

ガニシエルさんは子どもの時に聞いたウズベキスタンの昔話を二つ紹介してくださった。一つ目は、おんどりの話。普段他の動物を起こすはずのおんどりが鳴き方を忘れてしまう。羊や牛の鳴き声をまねて怒られるが、夜にみんなを食べてしまうきつねが侵入した時に、本来の鳴き方を思い出して大声で鳴き、みんなを起こして助けたという微笑ましいストーリーだ。二つ目は、いい子のズムラット (ZUMRAD) と悪い子のキムマツ (KIMMAT) の話。お母さんを亡くした働きものの娘は森の中で泊めてもらった家で熱心に働き、褒美をもらった。それに対し、怠け者の娘が同じことをしようとしてひどい目に会うという話だ。昔話に教訓的なものが多いのは世界共通なのかもしれない。その他、立ち寄った書店に置いてあった子ども向けの本はロシア語かウズベク語で書かれており、ディズニーの物語や不思議の国のアリスなど欧米の話も多くあった。



▲タシュケントの書店で購入した、ウズベキスタンの有名な物語。ウズベク語のものとロシア語のものがあった。

【まとめ】

日本語教育の中で古典を中心とする日本文学に触れているが、漢字の難しさが読む上で障害となっており、授業外では読むことは少ないのだという生徒の状況を知ることができた。一方、文字が少ないがストーリーを楽しめる漫画は、日本文学に興味を持つきっかけになるなど、文学の交流に大きな役割を果たしているのではないかとと思われる。

子どもたちは日本と同じように家族の年長者から体験談や昔話を聞いて育つようだ。ウズベキスタン、ロシアの物語にはもちろん触れるが、ほかの国の物語にも触れるようだ。物語には地域によらずどこか似たところがあるようにも感じた。ウズベキスタンと日本では家族や年長者を大切にするなど心が似ていると言われたことも印象に残った。思想の共通性は物語を身近に感じやすくするのもかもしれない。現地の人の口から文学への接し方を聞くことができ非常に有意義だった。一週間の研修で発見した、漫画のもつ大きさの影響や世界の物語の共通性などについて、今後深めていきたい。



Photo Gallery



## THE 地方都市ブハラ

ブハラは今回訪問した他の2都市と比べれば、どこことなく「地方」の雰囲気をする町であった。タシケントやサマルカンドでは最近撲滅され始めているように見えた白タクが平然と幅を利かし、駅前で待ち構えていたのもさることながら、警官も白タクを取り締まるどころか何の関心も示さない。警官と言えば、他の都市ではちらほらと見た、背中にロシア語で「ツーリストポリス」と書かれた服を着た警官も居らず、居るのは普通の警官ばかりである。

また、白タクのオヤジはがめつい。研修代表が長時間価格交渉という名の喧嘩をしようやく乗ってみれば、そのフロントガラスには小さく罫が入り、タシケントではとうてい見なかったようなボロボロの100スム札(約1円)が無造作に座席の脇に挟み込まれている。

タクシーの運転手が話すウズベク語も、同じ「ブハラ」の発音ひとつとっても、タシケントでは「ア」に近く感じた発音がどこもなく「オ」に近く感じるなど、響きが少し違う。道を眺めてみれば、決してタシケントでもはっきりしていたとは言えないアスファルト上の白線はさらに薄く、かつその上を砂が舞っている。そして、このタクシーは永遠にブハラの町に着かない。ただ、これは外国でよくある遠回りして小銭稼ぎをしようとしている運転手だったわけではない。そもそも白タクにメーターなんて無い。ブハラ駅は実は15キロも離れた隣町のカガンにあるのだ。日本と違い地方都市は古いゆえに土地がないのだろう。

そんな町に住む人々の顔ぶれもタシケントで見たようなロシア系っぽい顔立ちや、サマルカンドで見たような国籍不詳の混血顔も少なく、いかにもウズベク人という顔である。

だが、その一方で観光に依存する比率が高らしく、接した人の中にはタシケントより英語を話せる人が多かった。丸みを帯びたレンガ造りの城壁を持つ、いかにも中央アジアの城という風格を持ったアルク城の入り口で雇ったガイドも英語が話せたし、また、独特の丸屋根を持つ「タキ」とよばれるバザール(市場)の人々も、英語で話しかけてくる。一見当たり前に見えるこれらも、タシケントでは博物館に英語のガイドなんて居なかったり、売り込みすら英語が話せなかったりしたのを思えば驚愕の出来事だった。

物価もタシケントより安く、同じ種類のお土産もタシケントの半額足らずで売っているものも多い。だが、一方で小さな子供が商品を持って英語で「いかがですか?」と聞いてくるのには要注意である。値段を尋ねてみれば、タシケントの倍というんでもない吹っ掛けだった。もっとも日本人からすれば大した額ではないので、つい可愛さに買ってしまいたくなる。聞き分けはよく、「ごめんね、要らない」というと大人しく去っていった。

このように、地方都市らしく雑然としているが、観光地として妙なところで発展を遂げた町、それがブハラであった。(島本 高志)



イスマイール・サーマーニ廟



アルク城



観光のメインの一つ、フジヤ・ヌラバッド通り



ミル・アラブ・メドレセ

山根 佑斗

## ウズベキスタン人の 歴史認識について

私は、個人研究のテーマを「ウズベキスタン人の歴史認識について」と設定し、調査した。このテーマを選んだ理由は2点ある。第一に、高校以降の歴史学習を通して、中央アジアや同地のイスラーム勢力の歴史に興味を持つようになり、高校時代にはそれに関するレポートも作成していたためである。第二に、ウズベキスタンという長く複雑な歴史を持つ国で、ウズベキスタンが歴史についてどのような認識を抱いているのかに興味を持ったためである。

このテーマの調査をするにあたり、私は資料によってウズベキスタン史を概観し、それに基づいて各訪問先での聞き取りを実施した。このため、まずはウズベキスタン史の概観を説明する。

現在ウズベキスタンがある地域は、「オアシスの道」と呼ばれた交易路の一部として古くから栄えた。しかし統一国家が現れることはなく、ペルシアやアレクサンドロスの帝国といった大国の進出をしばしば受けることとなった。この中で、6世紀以降トルコ系民族の侵入を受けトルコ化が進んだり、8世紀以降イスラーム化が進むなど、現在まで続くウズベキスタンの要素が成立し始めた。13世紀にはチンギスハンの遠征を受けてモンゴル系のチャガタイ＝ハン国の支配下に入った。その後、1370年にはティムール朝が起こり、サマルカンドを中心に大きな勢力となった。この中でウズベキスタンは、ティムール朝ルネサンスと呼ばれる時期を経験し、イラン＝イスラーム文化が花開いた。その

ティムール朝はウズベク族によって1507年に滅亡し、以後はウズベク族の3王国が鼎立した。19世紀半ばには帝政ロシアがこの3国を植民地化した。ロシア革命を経て帝政がソビエト連邦に変わった後も、ソ連が支配を続けた。このソ連の支配のもとで、現代に続く中央アジア地域の民族・領域の境界が画定された。つまり、このとき今の「ウズベキスタン」の原型ができたのである。その後ペレストロイカを受けて、ウズベキスタンは独立に向かった。

この中で、私が注目したのはティムール朝である。ティムール朝はウズベキスタンを中心に発展した史上有数の大国であり、また「ウズベク族」に滅ぼされた国である。ただし、ここでいう「ウズベク族」は、現代のウズベキスタン人とは違うという。そこで、訪問先での聞き取りでは、ティムール朝への印象や、当時の民族と今の民族との関係を質問した。聞き取り調査は、サマルカンド外国語大学への訪問時及びノリコ学級の生徒との懇談会で行った。

まずはティムール朝への印象である。どこで聞いても、ティムールは国家の英雄だ、というような答えが返ってきた。アーミー系の学校では、ティムールの著作を読むこともあるという。また、どこに行っても、「ティムール」という単語はウズベキスタン人に伝わった。そのほかにも、タシュケントにはティムール博物館やティムール像があり、サマルカンドにはティムール廟はじめ多くの遺跡が保存されている。これらのことから、ティムールがウズベキス

ン人にとって偉大な、あるいは象徴的ともいえるような存在であることが窺える。

また、当時と現在の民族差については、あまり意識されていないようだった。私の民族差を問う質問に対しては、民族は当時と大差ない、という答えが多かった。これは事前に集めた情報とは違う結果であった。ノリコ学級の生徒によれば、歴史教育は民族史というより地域の歴史を扱うらしく、そのことがウズベキスタン人の民族観に作用しているのではないかと推察される。

今回の調査をまとめると、ティムールは予想通り尊敬される存在であるようだった。ティムール朝が歴史的、文化的にウズベキスタンに大きな影響を持つ以上、当然の結果ともいえよう。しかし、多くの人がティムールを知っているということは、ウズベキスタンの教育水準の高さも示唆しているのではないだろうか。

また、ウズベキスタン人の民族観については、予想と反する結果となった。しかし、我々日本人も、自身の民族については曖昧な観念を抱いてはいないだろうか。現代の日本人には大陸からの渡来人の影響も大きい。我々の多くはそのことについて意識していない。それどころか、現代の移民に否定的な意見も多い。この様に、ウズベキスタン人についても、それほど厳密な民族観を抱いてはいないのではないかと推測する。とはいえ、この点については推測の域を出ないため、今後学習を深めていきたい。

ウズベキスタン史は独特であるが、植民地支配や民族の問題等、アフリカ諸国の歴史とも共通する部分があると思われる。それ故、本稿のテーマはアフリカ研究にも応用できると考える。まだまだ改善の余地が多いため、これを補完し、今後の研究につなげていきたい。

▶ティムールの銅像  
▼ティムールの肖像画



片岡 恵音

## 多民族国家における 初等教育の言語的課題

アフリカを理解するうえでその多様性は非常に重要な観点である。日本の約 80 倍もの広大な大陸に 54 の国が存在し、2000 以上にのぼる言語が話されている。アメリカの言語学者グリーンバークはこの膨大な数の言語をコンゴ・コルドゥファン、ナイル・サハラ、アフロ・アジア、コイサン語族の四つに分類した。ここで指摘しておかなければならないことは、同じ言語集団内であっても相互に意思疎通を取ることが不可能な方言のグループが存在する点、ある特定の地域に特定の語族に属する言語が集中しているわけではなく分散しているという点である。これはアフリカの人々の移住、そして離合集散という生活様式上の特質によって生み出されたものである。このように隣接する民族同士でも言語が理解できないという状況は、現代社会において教育を拡充していくうえで大きな課題を投げかけている。

今回の研修で訪れたウズベキスタンでも公用語のウズベク語以外にロシア語、タジク語、カザフ語、キルギス語、トルクメン語など多数の言語が話されている。主に使用されているウズベク語とロシア語の二つでも文法構造や発音は全く異なっているが、人々はそれによって支障を受けることなく生活を送っており、またウズベキスタンの教育水準は高い。そこで私はウズベキスタンの人々がどのように多言語使用に対応しているのか、教育では母語以外の言語をどのようにカバーしているのかを知ることでアフリカの課題解決につながると考え個人研究テーマに据えた。本稿はその考察である。

まず、アフリカ諸国で問題になっている言語の多様性と近代教育システムの軋轢についてももう少し詳しく論じる。公教育で使用される言語は英語やフランス語などの公用語やスワヒリ語やハウサ語などのリングフランカが多いが、これらを母語とする人はほんの少数であり、このような言語の壁のために初等教育の中退率が高い。教授言語を公用語やリングフランカ以外の民族語にする試みもあるが、先ほど述べたような莫大な数の言語をカバーできるほど教員の数が多くないことを考えると、やはり一定の数の子どもたちは教育システムから零れ落ちてしまう。また、それぞれの言語でそれぞれの民族ごとに教育するという解決法は、教員や学校の数のために現実的に困難であるだけでなく、潜在的に民族の分断というアフリカの多様性を否定しかねない概念を内包している。

研修では、サマルカンド外国語大学を訪問し、日本語を第一言語として学ぶ学生 10 人にインタビューをした。用意していた質問は以下の五つである。

- (1) 母語は何語か。
- (2) 初等教育は母語で行われたか。いいえと答えた人は、何語で初等教育を受けたか。また、そのギャップをどのようにカバーしたのか。
- (3) 国内で複数の言語が使用されていることに対して困難や不便さを感じたことはあるか。
- (4) どのようなときにそれを感じるのか。
- (5) どのように対処するのか。

(1) の母語を訪ねる質問は、ウズベク語が 7 人、タジク語が 2 人、ロシア語が 1 人という結果になった。ロシア語が母語の人は予想していたより少なかったが、これはウズベキスタンでは使用される言語は地域によってかなり差があり、首都タシュケントではロシア語が主に使われているがサマルカンドではウズベク語が主流であるためである。

(2) の質問に対しては、インタビューを行った人のほとんどは母語（ここではウズベク語）で初等教育が行われたとの答えが得られた

だが、タジク語やロシア語が母語の学生もいたように、教授言語と母語が常に同じとは限らない。そのような場合の対処法を尋ねたところ、家と外では言語を使い分けるので問題ないという声が返ってきた。母語の他の第二言語を習得する過程についてはほぼ無意識なようで、三言語ほど話せるのは当たり前であるとの発言も聞かれた。そのため、(3) の一国内での多言語使用に対する不便さを感じたことがあるかという質問への答えは全員「いいえ」であった。それに伴って (4)、(5) の質問も不要になった。



▲三ヶ国語で書かれた建物の説明文。  
言語の多様性が垣間見える。

教育制度については、JICA で次のようなことがわかった。学校ではウズベク語とロシア語を使って授業が行われる。地域や学校によってどちらの言語に力を入れているかは異なり、親の方針で進学先が決定されることが多い。先に述べた通り、ウズベク語とロシア語は類似していない言語であるので、当然どちらかの言語が不得意であるという人もいたそうだが、そのような人は学校で苦手な言語を重点的に学ぶカリキュラムを選択することができるという。

学校で言語を学ぶための制度もかなり整っているようだが、サマルカンド外国語大学の学生の「気づいたら母語以外の言語も話せるようになっていく」といった意識から考えると、ほとんどの人にとって学校の言語の授業はあくまで補完的な役割を果たすものようだ。

むしろ幼少期から異なる言語話者との交流やメディアで日常的に多言語に触れているために習得した、といったほうが事実に近いだろう。

このことから、アフリカ諸国でも学校の中だけでなく外でも公用語やリンガフランカに触れる機会を増やすことが肝要であると思われる。私はウズベキスタンで複数の言語が大きな障害もなく使用されているのは、初等教育において言語サポートが充実しているからだという予想を立てていたのが意外な結果となったが、私が予想すらしていなかった観点を獲得することができ、非常に有意義な調査となった。とはいえ、アフリカ諸国でそれを実現するためには、伝統的生活との摩擦やインフラの未整備など問題が山積みであるので、今後はそういったことを課題として考察を深めていきたい。



質問に協力してくれたサマルカンド外国語大学の学生たちと。



Photo Gallery

## 思い出のタクシー【後編】

2日目の教訓もあって、3日目以降は岡田の知人のつてから2人組のタクシー運転手をお願いすることになった。最後までこの2人組の運転手がタシュケントでの私たちの“足”となった。この運転手たちがいたのでタシュケントでの移動はかなり楽になったと思う。ただ途中で道を間違えたり、エンストしたりと“ヤバい”状況があったのも確かである。特に毎回の何時にどこに来てもらうか、と値段交渉は本当に神経を使うものであった。この2人組は英語が使えなかったのだ。そのためこちらがウズベク語またはロシア語で行き先を書いて提示するか、彼らのスマートフォンの英語⇄ロシア語の通訳アプリを使って意志の疎通をはからなければならなかった。しかも、商売だから仕方がないのだが、お金の交渉はしっかりとしてくるし、かなり高額を請求もしてくる。こちらがぼうっとしていると飲み込まれてしまうため、気は抜けなかったのだ。その後も、トランクに荷物を入れたらドアが閉まらずこちらが勝手にそのドアを粘着テープで固定したり、ブハラでタクシーを選んでいる最中に勝手に荷物をもっていかれ取り返すことになったりと、いろいろとハプニングはおきたが、無事、誰ひとりかけることなく、タクシーを利用できたのは良かったと思う。

タクシーの交渉をやった自分として、これを読んでいる人に個人的に何かアドバイスを残すとしたら、それは度胸と“対等”だと思う。もちろん語学能力もあった方がいい。だけど数字を叫ぶぐらい語学能力とは言えず、誰でもできるだろうし、それよりはとっさに変化する状況に対していかに臆することなく何か発言できるか、だと思う。そこで必要になってくるのが“対等”だと思う。あくまでも自分と相手が“対等”だと思い、値段交渉の時でもその他の局面でもこちらの意思をみせ妥協しない。その後はさっぱりと握手する、そのぐらいでないといけないのではないかなと思う。

ともあれ、良い経験になったがこんなタクシー交渉をやらない方が明らかに楽だ。それに誰も不安にならないだろう。タクシーをめぐるやりとりは、異文化交流の難しさを物語っていたのではないかなと思う。（行方皓哉）



タシュケントの2人組の運転手。全員笑顔だが、裏では激しい値段交渉をしていた。



駅に向かうため、早朝、タクシーに向かう研修メンバー。どこか不安そう。



途中からこちらが用意したもの。グーグルマップを使い、要求された値段が適正かどうかを確認し、値段交渉をしていた。相場の確認は必須である。

# 個人感想

1 週間のウズベキスタン滞在を経て、

メンバーたちは何を思うのか。

それぞれが得た学びと

これからの展望を記す。

- 行方 皓哉 研修の“意義” ————— 69
- 岡田 悠乃 自己の相対化と、他者を受け入れること ————— 70
- 桐原 萌恵 多言語国家を感じる ————— 71
- 副島 紘介 多くの刺激を受けた初研修 ————— 72
- 島本 高志 ウズベキスタンの食欲と平和 ————— 73
- 山根 佑斗 ウズベキスタン研修を終えて ————— 75
- 片岡 恵音 「異国」と私 ————— 76
- 岸野 桜子 異なる世界だから、新しい発見がある ————— 77
- 高橋 愛理 ウズベキスタンを訪ねて学んだこと ————— 78

——ウズベキスタンか。短期アジア研修を実施すると決め、ウズベキスタンに国が決まった時、自分が思ったのはこれだった。MPJ Youthに入った人なら、誰もが、アフリカに行くことを一度は憧れる。そうでなくても、今までの短期アジア研修なら行く先は東南アジアだった。しかし今回は中央アジアで、英語圏でもないウズベキスタンだ。しかも今回は、自分が研修の実施責任者である。研修メンバーと同様、自分にとっても未知な地域に行けることに胸を躍らせつつ、どこまで研修を有意義に、そして安全なものにできるか、不安と期待の混ざった感情で迎えたのがこの研修であった。

研修が始まった。ウズベキスタンに着き、研修メンバーの安全を逐一確認しつつ、宿泊先へと、そして予定されていた訪問先へと向かう。タクシーの交渉は大丈夫か、鉄道のチケットはちゃんとホテルに届くのだろうか。そんな心配をしつつ、タクシーや食事、ホテルや訪問先機関での調整や交渉をしていった。そんな時、ふと気づくことがあった。現地のウズベキスタンの企業やホテルのスタッフ、鉄道員、そして一緒に観光してくれたサマルカンド外国語大学の生徒が、少しみんなと離れた所で、声をひそめて、同じことを聞いてきたのだ。「こんな人数をウズベキスタンまで連れてくることは大変だったでしょう」、「あなたはどのようにここに連れてきたのか」、「何か連れてきたことであなたが変わったことがあったか」。その後、たいていこう続く。「自分たちはお金がないから、あんまり国外にはでない」と。ウズベキスタンの人たちにとって訪問できる国外とは、キルギス、カザフスタン、そしてロシアだ。彼らにとって、この研修のように大人数で学生たちが国外に行くことはほとんどない。先の質問をする時、こちらへの興味と同時に、彼らの純粋なうらやましさを感じた。しかしそこにひがみは感じられなかった。

ウズベキスタンを出発する直前、ホテルから空港へと向かうタクシーの中で運転手からその理由が聞けたのではないと思う。タクシーの人数の関係上、運転手と2人きりだった自分は経済、国民感覚、隣国アフガニスタンの情勢について色々聞くことができた。運転手いわく、韓国人が年に何回かウズベキスタンに訪れ会社を経営し利益を上げ帰っていく。教育水準が高く、近年開国的な政策をとっているウズベキスタンの人々は、これを身近に見て自分たちも外へと行きたい、そんなキャリア形成をしたいと思いを募らせているのではないかと。

それが本当に正しいかは分からないが、少なくとも交流したウズベキスタンの人たちにとって、研修メンバーがその韓国人たちと同じように自由に行き来できる存在にみえたのではないと思う。もちろん今回の研修は経済的な利益のためではない。ただ、そんな研修も現地の人からみれば魅力的にうつったのだろうし、そこでしか得られない経験や知識を各々が取得することが研修全体にとって“意義”であるのだと思う。最後にもう少し言うなら、自分にとってこの研修の“意義”は、この研修を企画・実施し、その上で、研修メンバーそれぞれが参加してよかったと感じてくれることではないか、と思う。いろいろな楽しい思い出や反省点もあるが、研修中にメンバーが楽しそうにしていたことが満足だった。改めて、期待と不安を抱きながらも最後までついてきてくれた研修メンバーと、企画・運営をともにやってくれた研修副代表の岡田に、心から感謝申し上げたいと思う。

今回のウズベキスタン研修では、個人研究のテーマに限らず、多様な分野において幾度も衝撃を受けた。

まず、言語について。私は日本で生まれ育ち、日本語を第一言語として生きてきた。英語やフランス語を学んだが、依然としてフランス語はもちろん英語も私にとって「外国語」であるし、話す時は日本語で思いついたことを精一杯外国語に訳している。他言語を習得するということはとてもハードルの高いことだ。しかし、サマルカンド外国語大学に訪問した時、現地の学生が当たり前のように数カ国語を操っていることに気づき、衝撃を受けた。また彼らは言語に対する意識が根本的に自分とは違った。彼らは家族と話す言語の他に、友達と会話する言語、授業を受ける言語など3～4ヶ国語を自然に習得したとのことで、母国語・非母国語すなわち第一言語・第二言語の区別はあっても、操っている言語に「外国語」としての意識はないように感じられた。無論、この言語に対する意識の差には習熟度が大きく関係しているであろうことは容易に想像できるが、私にはそれ以上に、ウズベキスタンの学生が多民族国家という環境下で「自分と違うことを抵抗なく受け入れること」を自然に培ってきたように思えてならなかった。

次に、宗教について。今回の研修は、私にとって初めてのイスラム圏への渡航であった。元々ウズベキスタンがイスラム圏の中でも宗教的に寛容であるということは知っていたが、寛容さのあり様について驚いた。彼らはイスラム教の教えに従っているし、イスラム教について私たちに話すことを厭わなかった。しかし、イスラム教の教えが絶対的に正しいものだとか、私たち日本人の宗教に対する意識は（不思議がることはあっても）変だとかいう雰囲気は感じられなかった。これは、私が宗教に関して無知であるだけで、他の地域でも普通のことなのかもしれない。しかし、私にとっては宗教というと、フランスでライシテ（政教分離原則）が掲げられながらも宗教シンボル着用禁止法が制定され、完全な宗教的自由が認められていないことや、中国で政府にとって好ましくない宗教を信仰していると信用スコアで不利に働くこと、また自分自身が無宗教であると話した時に白い目で見られた経験が思い浮かぶ。このため、上述の言語に関することと類似するが、ウズベキスタンでは「自分の当たり前は絶対的でなく、他者に強いるものではないこと」が根付いているように感じた。

もちろん、研修中は珍しいものを見るような目で見られたこともあったが、私たちが嫌悪する雰囲気はなく、温かく受け入れてくれた。この研修で受けた衝撃は、私が今後他者と関わる上で、また社会課題を考える上で、貴重な財産になると信じている。そして、この研修の企画や実施段階に携わってくださった全ての方に深く感謝申し上げます。

## 桐原 萌恵

## 多言語国家を感じる

古くから交易の町として栄え文化や人々の交流が盛んに行われてきた土地であるウズベキスタンを訪れたことで、私は今まで以上に民族の多様性について考えさせられた。

一番衝撃だったのは、ウズベキスタン人が操れる言語の多さだ。国内にはウズベキスタン系のほか、タジク系、カザフ系、ロシア系の民族が多く、幼い頃から他の言語が身近にある環境で育つ。また混血の人は生まれた時から2つの言語を同時に覚えたりもするので、どちらが難しいという意識はないそうだ。そして混血でなくても成長していく過程で自然と母語以外の言語も身につくそうだ。その一因として言語によりグループ分けして授業をするシステムがあるそうだ。

サマルカンド外国語大学の生徒にインタビューをした際に教えていただいたのだが、高校や大学では入学の際に母語にかかわらず何語で授業を受けるかの選択ができるそうだ。授業を何語で受けるのかによって、日常をともにする友達も、先生も、全てが左右されるこのシステムには驚いた。単一民族国家である日本で、授業は日本語が当たり前という環境で過ごしてきた私にはとても衝撃だった。その話を聞く中で、同じ言語グループの中でもその言葉を母語とする人とそれ以外の人の間でコミュニケーションはどうとるのか、疎外感を味わうことはないのかと疑問を持った。ある生徒によると、彼はそれぞれの友人の言語能力を把握し、話す人、場所によって言語を変えるそうで、それが当たり前のことだと教えてくれた。TPOに応じて話す言葉を変えるなんて、ウズベキスタン人にとって新しい言語を学ぶことに対するハードルの低さのようなものを感じ、ただただ驚愕した。

私は今回の研修の中で、「何ヶ国語話せますか?」と何度質問したか数えきれない。3ヶ国語を話せるのは普通で、それ以上であれば周りから認めてもらえるらしいが、中には6カ国後ほど話せる猛者もいた。それぞれが違うルーツを持ちながら、かつウズベキスタン人としてのアイデンティティと誇りを持ち、積極的にその他の言語を学ぶ姿勢を出会う人びとから自然と感じた。同じ年代の大学生がこんなにも自由に、そして流暢に多くの言語を操っているのを実際にこの目で見ることは刺激的で、貴重な体験となった。

私自身、昨年の夏にユースのメンバーとしてマラウイ研修に参加させていただく機会をいただいた。マラウイで私たちが訪れた地域では主に英語とチェワ語が用いられており、日本語を主に話し外国人とは英語でコミュニケーションをとる日本との大きな差は感じられなかったが、今回の研修では多くの言語を耳にした。単純にウズベキスタンとマラウイの比較をするだけでは中央アジア地域とアフリカ地域の比較が出来る訳ではないが、この研修で得たことをさらに深め、発信していきたいと思う。

当研修を支えてくださった方々、また研修メンバーの方にはこのような体験ができたこと、感謝しきれません。本当にありがとうございました。

感想

## 副島 紘介

## 多くの刺激を受けた初研修

今回のウズベキスタン研修はMPJ Youthの研修として初の中央アジアであり、そして僕自身初のMPJ Youthの海外研修であった。渡航前にウズベキスタンについて調べるまでは、ウズベキスタンについて持っている知識はティムールなどの歴史についてのごくわずかであり、どのような国なのかははっきりとしたイメージを抱いていなかった。今回、「ウズベキスタンにおける外国企業の進出」というテーマを設定したが、渡航前に自身のテーマだけではなく幅広いテーマについて事前に知識や情報を持って訪問することができ、事前情報で抱いていた情報と現地で見えて聞いて掴んだ状況を比較することができたことは、一人の単独渡航ではすることができなかったであろう。非常に貴重な経験となった。個人研究の一環で住友商事を訪問してお話を伺うことができたことで、ウズベキスタンのビジネス環境について事前に抱いていたイメージとの実際の違いを知り、事前に抱いていた疑問を解消することができた。そして、今回の研修でとても印象に残っているのは、サマルカンド外国語大学、ノリコ学級の学生と話をする機会を持つことができ、日本語を学ぶウズベキスタンの高校生、大学生の考え方を知り、日本語を含めた外国語に対するモチベーションの高さを感じることができたことである。ウズベク語、タジク語、ロシア語などの小さい頃から話してきた言語に加えて、英語や日本語などの外国語も積極的に複数学ぼうとする姿勢は英語すら覚束ない自身にとっては今後語学の学習を続けていく上でとても良い刺激を受けることができた。また、今回の研修では研修を組み立て、現地での大変な実務を行って僕たち研修メンバーをまとめてくださった2年の先輩の方々に大きな感謝の気持ちを抱くとともに、先輩の方々の存在の大きさを感じた。今回の研修を通して、1年生同士、そして2年生とも皆で親睦を深めることができとても良い機会となった。次に来るアフリカ研修では今回のウズベキスタン研修を経て学び得た姿勢や経験をしっかりと活かし短い研修期間を自分にとって最大限に有意義なものとするよう頑張りたいと思う。そして、最後にはなるが今回の研修を引っ張ってくださった先輩方、現地での取材を快く引き受けてくださった住友商事並びにその他訪問機関の方々、そして共に研修を過ごしてくれた1年生の皆に感謝を示したい。今後、運営代としてMPJ Youthを引っ張っていけるよう1年生皆で協力して頑張っていきたいと思う。



感想

## 島本 高志 島本 高志 ウズベキスタンの食欲

ウズベキスタンは中央アジアにあり日本での認知度は未だに低く、ひいては我々はよく内戦や治安が悪いといった他の「スタン」がつく近隣地域と同一視しがちである。だが、今回ウズベキスタンに行って明らかだったのは、人々の生活も心も想像されるそれらよりはるかに豊かであるということだった。例えば、研修グループと少しはぐれてしまえば「あっちに行った」と身振り手振りで教えてくれる人が居て、他の外国人観光客が物を落とせば後ろから拾って届けている人もいる。

また、ウズベキスタンにおいて非常に困ったことの一つは「英語が通じない」ことだったが、地下鉄で駅員と双方言語が通じず困惑していれば何処からともなく現れたオジサンが通訳してくれた。そうして身をもって染み付いたウズベキスタンの人々の優しさだったが、それ以上に忘れられないのは最終日に交流したノリコ学級の生徒の言葉だ。「最初日本に行くとき、とても怖かった。なぜならウズベキスタンでは人々は非常に親切で治安も良いが、外国はそうではないとも知っていたし、日本もそうした外国の一つだと思っていたから。」

この言葉はすべてを表しているように感じる。世界的にも治安が良いことで比較的名だと思われる日本だが、日本語をスラスラと話す学生ですらそのイメージがないという、日本から見たウズベキスタンのみならずお互いに対する知識の無さがありありと見える一方で、ウズベキスタンの治安自体は非常に良く、人々が親切だと察せられる。訪問先で個人の所見との断りのあと伺った「ウズベキスタンは食料が豊かであり、そのため格差はあるが人の心は穏やかなのではないか」という言葉はその通りなのかもしれない。

そして今、ウズベキスタンはソ連崩壊以来、25年ぶりの変革の時を迎えている。新大統領は相次いで改革を行い、様々な制度面で激しい変化が見られる。経済的な自由化等も相次いでいる。また、ソ連時代に画一的教育を受けた層は減り始め、新たにウズベキスタン時代の民族主義色を増した教育を受けた人々が増えてきている。今後この国がどう変化していくかは楽しみでもあり少し不安でもある。だが、この国の建物と空が青く美しいように、この国の人々の心もまた美しいままだろうと、根拠もなく何となく感じる研修であった。

感想

## 山根 佑斗 ウズベキスタン研修を終えて

今回のウズベキスタン研修は、私にとっては3回目の海外渡航だった。今までアメリカのボストン、そしてルワンダを訪れたが、この2か国と比べてくに際立っていたのが、歴史的建造物の多さ、特に中世～近代の遺跡の多さである。

ティムール廟やブハラ=ハンの居城・アルク城など、教科書にのるような遺跡を実際に見ることができたのは、大きな財産だった。自分には縁がないであろうと思いながらティムール朝を学んでいた高校時代からは考えられないことであった。歴史に興味を持っている自分にとって、数多くの遺跡を見られたことはうれしい体験だった。

また、イスラーム圏に入ったのも初めてであり、生れてはじめてモスクやミナレット、マドラサを見ることができた。このことも、大変価値あることだった。自分が今まで親しんできた日本的建築、或いは西洋的建築とは全く異なる様式の建造物は非常に新鮮であり、月並みな言い方ではあるが、世界観が広がるのを感じた。

他方で、JICAや住友商事の方々、所謂「グローバル人材」として現在活躍されているの方々のお話が聞けたことも、貴重な体験だった。今まで、頻りにグローバル人材という言葉聞きながらも、それはあくまで漠然とした言葉だった。だが、今回の機関訪問を経て、グローバル人材へのイメージが明確になった。私の将来のキャリアにとっても、大変有益な研修となった。

今回、初めてMPJ Youthの海外研修に参加したが、とても意義深い体験を数多くするjことができた。上述のこと以外にも、現地の学生との交流や、学生のみでの海外渡航など、MPJ Youthでしかできない体験をすることができ、価値ある1週間を過ごせた。この研修を糧に、今後の学生生活やMPJ Youthでの活動を充実させていきたい。



感想

## 片岡 恵音 「異国」と私

ウズベキスタンに行く、と人に言うといつもだいたい同じ反応を返された。「ウズベキスタン!?!どうして!?!」私たち日本人にとってウズベキスタンは遠く離れたまさに異国であり、私自身もこの機会が無ければ一生訪れることはなかったかもしれない。渡航する前のウズベキスタンの印象は、治安が悪そう、サッカーの試合でたまに見かける国、といった非常に曖昧なものであった。だが今は、人々の顔もホテルからの景色も料理の匂いもモスクの空気感もありありと思い出すことができる。9日間の研修で私にとってウズベキスタンはもはや「異国」ではなくなった。

私の個人研究テーマは言語と教育に関するものであったが、事前準備で研修メンバーのテーマを共有し、ウズベキスタンのエネルギー事情であったり伝統的衣装という観点に触れることで、それまでの曖昧だったウズベキスタン像が少し輪郭を持ち始めた。また、研修メンバーそれぞれの視点や興味分野に大きな刺激を受けた。現地ではタシケント、ブハラ、サマルカンドの三都市を訪問したが、それぞれ非常に密度の濃い経験をした。中でも印象的だったのは、サマルカンドでの学生との交流だった。私の研究テーマの関係でサマルカンド外国語大学に研修6日目の午前に訪問した。そこで日本語を学ぶ同年代の学生に、研修メンバーがそれぞれの興味に沿って質問をした。私は多言語国家の人々が母語と他の言語とのギャップをどのように埋めているか、という研究テーマだったためそれにあわせていくつか質問をしたが、現地の学生から返ってきた答えは私の予想に反して「気づいたら母語以外の言語も話せるようになっていく」というものだった。そこから、公的な制度以外のもっと日常的なレベルでの活動の重要性に気づくことができた。

その日の午後に学生さんがサマルカンド市内を案内してくれた。案内してくれた学生は3年生が中心で、基本的な会話は全く問題がなかった。彼らと同じように外国語を専門に勉強する身として、非常に大きな刺激を受けた。それだけでなく、初対面の日本人に対して嫌な顔一つせず親切にしてくれたことをとても嬉しく思った。また、彼らの持つ価値観に触れ、とても有意義で楽しい時間を過ごすことができた。

帰国した今、ウズベキスタンは遠く離れているが、研修で得た経験は今もそしてこれからも私の中で生き続けるだろう。次はそれをアフリカで活かせるよう、努力を続けていかなければならない。日本で次期研修先であるルワンダについて学びを深め、メンバーと刺激しあい、充実した研修になるようにしていきたい。

感想

## 岸野 桜子 異なる世界だから、新しい発見がある

---英語が全く通じない!

ウズベキスタンに到着してまず私が驚いてしまったのはこのことだった。ロシア語かウズベク語ができなければ大変だと、頭ではわかっているつもりだったが、駅にも英語の表示がない、タクシーの運転手に英語が通じない、そのことに面食らってしまった。数でさえも、紙に数字で書かなければわかってもらえない。英語なら世界中どこに言っても通用するという誤った認識を抱いていたことを痛感した。

だからこそ、複数の言語を使いこなし、さらに日本語を勉強する学生の姿には目を見張った。多民族国家であるため、周りにウズベク語を話す人もいればロシア語を話す人もいる。タジク語を母語とする人が、ウズベク語かロシア語で授業を受けなければならないこともある。これは学校生活を送る上で大きな障害になるのではないかと思っただけで、生徒たちにとってそれは当たり前のことであって、とくに不便だとは思っていないようだった。「3つ言語ができるのは当たり前。4つできる人は上手だなと思う」という言葉が印象に残っている。身の回りに自分とは異なる言語を話す人が大勢いるため、新しい言語に挑戦することに対するハードルが低いのだろう。一方、日本はほとんど単一民族国家であり、日本語ひとつだけを話せば生活で困ることはない。必要に迫られないので語学に対するモチベーションはこの国ほどは高くないのではないかと思う。

ウズベキスタンにはモスク、メドレセ、ミナレットなど、日本では見慣れない建物で溢れている。青色に輝く、ぼうし型の屋根。花の模様の施された外門。金色に塗られた内壁。風景の中に溶け込む美しい建造物の数々にうっとり目を奪われた。同時に、新鮮な体験をして想像力を掻き立てられた。異なる文化に触れて、自分とは異なる背景を持つ人と話すと、新しい発見がある。当たり前だと思っていたことが当たり前でないとわかってくる。そのことを肌で実感したように思う。

やはり、自分とは異なる世界に足を踏み入れること、その人たちと直接話すことは大切だ。

そのためには自分の国のことをきちんと知り、説明できるようにしなければならない。ウズベキスタンの文化に誇りを持ち、歴史を語りながら建物を案内して下さった方々、ウズベキスタンでの生活について話して下さいました。学生のみなさん、伝統的な衣装をつくるムハヨさん。日本はどうだろうか、と考えながらお話を聞いていた。言語は障壁じゃない、新しいものに出会うための鍵だ。差異は障害じゃない、自分を大きくするためのチャンスだ、そう感じた。

最後に、お世話になった方々に感謝申し上げたいと思う。支援して下さった方々、研修を支えて下さった先輩方、学びの機会を与えて下さった訪問機関の方々、そして実りある研修をともにしたメンバー、関わって下さった全ての方のおかげで研修を成功させることができました。本当にありがとうございました。

感想

## 高橋 愛理 ウズベキスタンを訪ねて学んだこと

私は正直ウズベキスタンとはどういった国なのか、歴史でしか学んだことがなくイメージが掴めていなかった。友人にウズベキスタン研修の話をしてその場所がどこなのか知っている人は少ないが興味を持つ人も多かった。実際にウズベキスタンを訪れて一週間過ごしてみて一番印象に残っているのは言語の壁というものである。私自身英語を中心とした学部に所属しているからなのかもしれないが、海外では英語が通じるとやはり心のどこかで思い込んでいたためロシア語しか通じないという環境は私にとってとても良い刺激になった。しかしウズベキスタンの人々は通じないからと言って冷たいわけでもなくみんな通じないなりに何とかして伝えようとしてくれ、言語とは思った以上に大きな問題ではないということを知り言葉が通じないということに抵抗がなくなると感じる。

訪問先では、日本人の方だったり英語が話せる方だったり、また日本語を勉強している方だったのでさほど苦労することはなく疑問に思ったことなどはしっかり聞くことができた。住友商事や JICA のウズベキスタン支部で日本人の方のお話を聞いて日本企業がウズベキスタンをどう捉えビジネスをしているのか、またウズベキスタンにおける日本の役割などを深く考えるようになりとても有意義であった。そしてビビハニムというウズベクファッションを扱うブランドのお店でも話を聞くことができ、多方面からウズベキスタンについて知ることができた。サマルカンド外国語大学やノリコ学級ではみんな日本語で話してくれ些細な疑問にも真剣に答えてくれたり、また我々にも日本についての質問をしてくれたりとお互いにとってとても実のある時間となった。私個人タシケントやブハラに比べサマルカンドは日本に対する興味が強かったように思える。バザールやお土産を売っている店などはもちろん商売で日本語を少しやっている人も多かったが道端ですれ違う人々や警備員などに日本語で話かけられることも多々あり、たまにとっても流暢な日本語を話す人もいた。理由を聞くと日本への留学経験があったり自分で勉強したりとみなとても積極的に日本について勉強していてとてもうれしく感じたと同時に、日本ももう少しウズベキスタンや他の国に興味を持つべきだなとも感じた。そしてやはり日本に在るだけでは得られない宗教や自国また他国に関する現地の人たちの捉え方であったりその国の風潮などを知れてさらに興味が深まった。研修という形で異国の地を訪れるのはその国について知る上で一番効率の良い方法だと感じた。私自身も積極的な態度を忘れずこれからも日本はもちろん他国についても知見を深めていきたいと思う。

感想

おまけ

### ウズベキスタン研修語録

- ・「reponsibility」  
guilty で代用することも可能。この事態の責任の所在は君にあるよと伝えたいときに使用する単語。指をさしながら語気を強めて言うといい。
- ・「～って何ですか？」  
きさくちゃんの金言。普段いかに unnecessary な日本語を使っているかを認識させる問いかけ。
- ・「Open now !!!」  
ナメさんのタクシー対応術の中の一つ。いつの間にかトランクに詰められていたスーツケースを救った。
- ・「おいコラァ」  
上層部（主に Y さん）からの圧力。こわい。
- ・「いつまでもあると思うな 親と金」  
ウルグベク天文台でウズベキスタン人（であるはずの人）が放った名言。
- ・「ミルダケ one minuite」  
レギスタン広場の客引き常套句。見るだけでも一分だけでも真っ赤な嘘。
- ・「エモい」  
壮麗なウズベキスタンの建築物の数々を見た際にずっと連発していた単語。ポキャブラリーの乏しさを思い知らされた。
- ・「カラカルパクスタン！！！！」  
今回の研修で初めて知った国名。そこはかたなくかわいい（ような気がする）ので人気を博した。
- ・「おまピョン」  
よくわからないけど岸野家では警察のことらしい。

発行：ミレニアム・プロミス・ジャパン・ユースの会  
執筆：行方皓哉，岡田悠乃，桐原萌恵，副島紘介，島本 高志，山根 佑斗，  
片岡 恵音，岸野 桜子，高橋 愛理  
編集：藤原風輝  
© 2019 Millenium Promise Japan Youth  
本書の転載・複写を禁じます。2019.06

ミレニアム・プロミス・ジャパン・ユースの会  
Mail : mpj.youth.2009@gmail.com  
Web : <http://mpjyouth.official.com>

